

[24]韓国研究センター年報

<https://hdl.handle.net/2324/7218211>

出版情報：韓国研究センター年報. 24, 2024-03-21. Research Center for Korean Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



キックオフシンポジウム

九州大学韓国研究センター×九州韓国研究者フォーラム
共同研究プロジェクト・キックオフシンポジウム

『世界史』の中の韓国： その構造変動に関する総合的研究

主 催：九州大学韓国研究センター、九州韓国研究者フォーラム

日 時：2023年3月7日（火）13：30～17：10

場 所：九州大学西新プラザ大会議室 A

後 援：韓国国際交流財団、駐福岡大韓民国総領事館

第1部

木宮正史（東京大学大学院総合文化研究科 教授）講演

「激動する国際政治の中での韓国・朝鮮半島の軌跡と展望：

冷戦・分断下の体制劣勢・開発独裁から体制優位・先進民主主義国へ」

・コメント：出水薫（九州大学大学院法学研究院 教授）

第2部

斎藤真理子（翻訳家）講演

「冷戦時代の肖像と『密航の文学』」

・コメント：辻野裕紀（九州大学大学院言語文化研究院 准教授）



第1部

激動する国際政治の中での韓国・朝鮮半島の軌跡と展望： 冷戦・分断下の体制劣勢・開発独裁から体制優位・先進民主主義国へ



木宮正史*

司会：本日、『世界史』の中の韓国」ということで、木宮先生と斎藤先生のお2人をお招きしてシンポジウムを開催させていただきます。

開催に先立ちまして九州大学韓国研究センター、センター長の元兼先生のほうからごあいさつをいただきます。

元兼（韓国研究センター長）：皆さん、こんにちは。ただ今、ご紹介にあずかりました九州大学韓国研究センター長を昨年4月より拝命しております九州大学人間環境学研究院の元兼と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。主催者の一人として、開会に際しまして一言ごあいさつ申し上げます。

まずは皆さま、年度末でかつ平日の昼間というご多用な中、そして今回はオンラインによらず対面のみとしたのにもかかわらず、このようにたくさんお集まりいただき、誠にありがとうございます。

そして、本キックオフシンポジウムの後援をいただきました、駐福岡大韓民国総領事館の朴建燦（パク・コンチャン）総領事をはじめ、総領事館の皆さまに感謝申し上げます。本日、ご参画いただき誠にありがとうございます。

そして何より本日のシンポジウムを物心共にご支援くださっております、韓国国際交流財団の皆さまに心より感謝申し上げます。大学院生へのフェローシップ、奨学金をはじめ九州大学韓国研究センターは長きにわたりご支援いただいております、この3年間は「東アジアにおける人の国際的移動・日韓の交流と共生・多様性の追求」というテーマで研究助成を頂きました。

おかげさまで昨年の夏に2冊のセンター叢書を、九州大学出版会より刊行することができました。また、本日のシンポジウムは次の3年間のテーマといたしまして採択と内定をいただいております『世界史』の中の韓国：その構造変動に関する総合的研究」というタイトルを、そのまま銘打って4月からの研究スタートに向けて文字どおりキックオフとなる機会として企画いたしました。

日本では年度末ですが、ご承知のとおり3月はまさに韓国では始まりの時期で、春の訪れを予感させる機会になればと願っております。少し春めいてまいりました、この福岡の地に本日は東京大学の木宮正史先生、そして翻訳家の斎藤真理子先生、お2人のゲストをお招きすることができました。

実は、私は韓国研究の専門家、プロパーではないセンター長なのですが、そんな私の書棚にも、お2人の

* 東京大学大学院総合文化研究科・教授。国際政治学・朝鮮半島問題が専門で、『日韓関係史』（岩波新書）、『国際政治のなかの韓国現代史』（山川出版社）など著書多数。

ご著書がありました。それほどのビッグネームですので、今日こうして多くの方にお集まりいただけたのだと思います。

韓国研究センターの仕事をするといつも思いますのは、こうした異文化交流の面白さと奥深さです。ご活躍の舞台の異なるお2人のお話と、ここにお集まりいただいております多彩なご経歴の皆さまとの交流によって、これからどのような化学変化が生み出されるのか、『『世界史』の中の韓国』という空間だけではなく、時間という縦軸まで絡んだ研究テーマが、これからどこまで羽ばたいていけるのか議論の展開に期待しております。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは早速ですが、第1部のほうに入らせていただきたいと思います。この第1部は木宮先生からご講話をいただきたいと思います。その後、九州大学大学院法学研究院教授である出水先生より、コメントをいただければと考えております。その後、質疑応答の時間を用意しておりますので、会場の方から忌憚なくご質問、コメントをいただけたらと考えております。

それでは引き続き私のほうで、この第1部で基調講話をいただきます東京大学の木宮正史先生につきまして皆さんもよくご存じだと思いますけれども、あらためて簡単に略歴を紹介させていただきたいと思います。

先生は1960年のお生まれで東京大学大学院法学政治学研究科博士課程、そして高麗大学大学院政治外交学博士課程を修了され法政大学法学部助教授、ハーバード大学の客員研究員などを歴任され、現在は東京大学大学院総合文化研究科教授でいらっしゃいます。

ご専門は比較政治学、国際関係論、朝鮮半島地域研究で、主な著書に『国際政治のなかの韓国現代史』（山川出版社）、『ナショナリズムから見た韓国・北朝鮮近現代史』（講談社）、『韓国一民主化と経済発展のダイナミズム』（ちくま新書）、『日韓関係史』（岩波新書）など多数ございます。

先月開催されました、九州韓国研究者フォーラムと韓国研究センターの共同研究会で神戸大学の木村幹先生の講話の中でも「木宮世代」という言葉がしばしば引用されたのが、非常に印象的でした。

そのように韓国政治学をこの間、リードされてこられた先生に、本日は「激動する国際政治の中での韓国・朝鮮半島の軌跡と展望：冷戦・分断下の体制劣性・開発独裁から体制優位、先進民主化、民主主義国へ」としてご講演いただきます。先生、どうぞよろしくお願いいたします。



木宮：ただ今、ご紹介にあずかりました木宮と申します。今、今日の話の基本的なエッセンスというよりも、ただ、ただ、それからもう10年以上たっているので、また少し変わってきましたけれども。今日のお話の基本的なエッセンスは、先ほどご紹介にあずかりました、『国際政治のなかの韓国現代史』という本の中で論じている問題意識です。

昨日、元徴用工問題に関する韓国政府の対応が出ました。半ば予想されてはいたんですが、韓国の国内ではかなり反発というか、反対が非常に強くて、昨日から今日も、日本のメディアというよりも主に韓国のメディアから、わんさか取材の電話がかかってきて、なかなか大変だった状況でした。

この問題、私自身も明確な答えがあるわけではないですが、今後の日韓関係を考える上で一体これをどのように生かしながら、いろいろ危機を乗り越えていくのかということを考えざるを得ないのかと思っております。

この問題については後の部分で関連がある話をさせていただきたいと思いますが、もしもっと具体的にストレートに何か話を訊きたいということであれば、ご質問をしていただければ、お答えできるかと思いますので、そのつもりでいただければと思います。

今日のお話は、私にとってみれば非常に「わが意を得たり」という依頼であります。『世界史』の中の韓国」ということで。何で「わが意を得たり」なのかということなのですが、私は一方でやっぱり韓国、それから北朝鮮、朝鮮半島というのは、もちろんそれぞれ非常に独歩的な側面を持っているわけですね。

例えば、韓国は植民地だったのが独立して開発途上国になって、それから NICs、アジア NIES と呼ばれる時期を経て、もう現在、世界第10番目ぐらいの GDP を持つ。もう韓国を先進資本主義国と言っても、何の違和感もないと思います。それから度重なる民主化の挫折にもかかわらず、基本的には内発的に民主化に成功している国です。

それから北朝鮮に関して言えばグローバルな冷戦が終焉して、その結果として、例えば旧ソ連、中・東欧諸国の社会主義は軒並み崩壊をしたわけですが、それにもかかわらず生き残っている体制、しかもそれなりの強靱性を持った体制であるわけですね。それから、これはべつに何の褒め言葉でもないですが、いわゆる世界でも非常にまれな全体主義国家として残っています。これは明らかに他の国にはない朝鮮半島、韓国、北朝鮮の特徴かというふうに思います。そういう意味で言えば、非常に他にあまり例がないような特徴を持つという側面があるかと思います。

ただし、1国だけで閉じているかといえ、そうではないわけです。詳しくは後でお話をしますが、非常に大きな外からの制約もしくは機会を受けているわけですね。そうした制約もしくは機会にどのように対応したらいいのかということ巡って、特に近代以降はずっと歩みを続けてきたわけですね。

したがって、グローバルヒストリーとしての朝鮮半島の歴史的な経験というふうに書きましたが、私は世界史の中で韓国、北朝鮮、朝鮮半島を考えるということとともに、世界史、グローバルヒストリーを、朝鮮半島を通して見ていくことができるのではないかと考えています。

私自身が、もともと何で朝鮮半島、韓国に関心を持つようになったのかというのも、まさにその点なんです。日本の朝鮮半島研究者は日本との関係に関心があって、いわゆる朝鮮半島を研究するようになったという人が圧倒的に多いと思います。しかし、私は全く違います。

私は正直言うと、日本との関係ということはあまり意識していませんでした。私が常々国際政治、国際関係という学問に関心を持った理由は、国際関係、世界をどのような視点から見たいか、ということでした。

その場合に、私は周辺部から国際関係を投射して見てみたいと。とにかく国際関係というと大国間の国際関係イコール国際関係だという見方が強いわけですね。これは現在でもそうですが、私はそうではなくて、その周辺部から光を当て投射して世界を見てみたい。では、どこを基点に置いて光を当てるのか、その中で選んだのが韓国であり朝鮮半島でした。

ご存じのように朝鮮半島というのは、いわゆる南北の分断体制にあるわけです。さらに韓国は、既に当時は NICs、もしくは、アジア NIES の一員といわれるように急激な経済発展を遂げていたわけです。そうい

う意味で、国際分業体制の中で非常にダイナミックな動きをする国の一つであったわけです。

しかしながら、そうした経済発展をある程度遂げたにもかかわらず、政治的には民主主義が達成されなかった。これが1980年代の半ばぐらいまでの状況だったわけですね。それが87年の民主化抗争を契機として民主化され、その結果、現在韓国は先進資本主義国であり先進民主主義国ですね。したがって、当たり前の話ですが、日本と全く価値観を共有する、そういう国になったと思うんです。

私は、朝鮮半島は世界史の中で見るという点と、それから韓国、北朝鮮、特に朝鮮半島を通して、そこに光を当てていわゆるグローバルヒストリー、世界史を見る、そういう2つの視点に基づいて今日は、お話をさせていただきたいと思います。

朝鮮半島というのはそれぞれ、最初は共通する内的な条件があったわけですし、外的な環境に関しても共通性があったわけですね。もちろん、内的な条件、外的な環境も変わってくるわけですが、それに対してどのように対応するのかによって、韓国と北朝鮮という2つの国の戦略が違ってきたわけだし、その帰結も異なってきた。

学生にこんなことを話すと、実感がないようなのですが、1960年代までは、いろいろな異なる統計があるので一概にそうだとも言い難いところはあるのですが、韓国よりも北朝鮮の方がある程度豊かだったと私は思います。

ところが、今はどうでしょうか。私は仕事柄というか研究柄、今まで、北朝鮮に9回ほど行ったことはあります。韓国は、もちろんしょっちゅう行っているわけですが、やはり私は、次のように思います。韓国と北朝鮮とは、なぜ、こんなに違ってきてしまったのか。元々は同じで、途中までは北朝鮮の方が豊かであったのに、なぜ今はこんなに違ってしまったのかと。一体これはなぜだろうと思います。そういう問題を考えていきたいと思います。

もちろん、韓国は素晴らしい、北朝鮮は駄目だと、そういう単純なことを言うつもりは全くありません。しかし、なぜ同じような初期条件であったものがこんなに違ってしまったのか、どのように外的な環境に対応したのか、そして対応するためにどのような戦略を選択したのか。それがどのように異なる帰結をもたらしたのか、こうした問題を考えてみたいと思います。

I 朝鮮半島の直面した外的制約と内的対応

1 朝鮮半島に課される制約①：冷戦

朝鮮半島というのは非常に強い外的な制約、これは制約であるとともに機会ということになると思うのですが、そうした非常に強い制約・機会を受けてきたことは間違いないと思います。例えば、日本などとは比べものにならないぐらいの強い外的な制約を受けていると思います。

一番代表的なのは、第二次世界大戦後のグローバルな冷戦が、直接に反映されたものが、南北の分断体制であったわけです。なぜ朝鮮半島が分断されたのか。言い換えれば、なぜ日本が分断されなかったのか、ということです。

第二次世界大戦における開戦責任を持つのは、日本やドイツなわけですね。ドイツは、その責任を直接に受け止めて東西に分断されたわけです。これは周りの国、フランス・イギリス・ソ連も強いドイツは困る、ドイツが強いとろくなことはないと考えたから、ドイツを分割することに共通の利益があったわけです。

でも、考えてみてください。日本は分断されませんでした。代わりに分断されたのが朝鮮半島です。もちろん、私は日本が分断されなくて良かったと思います、本当に。もし分断されていたら、親兄弟にも会えない、そういう状況だったかもわからないわけです。

グローバルな冷戦が分断をもたらしたのは、第二次世界大戦の戦後処理を巡ってアメリカとソ連が、まずは朝鮮を分割占領して、そのうち米ソの対立が激化することで結局、韓国（大韓民国）・北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）という別々の国、南北の単独政府ができたということになるわけですね。

さらには、この2つの国は、お互いに戦いました。朝鮮戦争です。当初は、これはどちらの方が正当性を持つのかを巡る「内戦」として始まったという側面が強かったと思いますが、そこに国連軍の主軸となったアメリカが加わり、さらに中国が人民志願軍として加わって、この朝鮮戦争というのは基本的には米中戦争になったわけです。

ソ連が、もし本格的に参戦する、そしてアメリカが核兵器を使うということであれば、これは第三次世界大戦になったとしても何の不思議ありません。実際、国連軍司令官のマッカーサーはトルーマン大統領に、中国東北部の主要都市とか、ソ連極東の主要都市に原爆を投下するということを進言したんですね。今は、ロシア・ウクライナ戦争で核の使用の問題がいろいろ取りざたされていますが、朝鮮戦争も核戦争にエスカレートする可能性はあったわけです。

ただ、朝鮮戦争はいわゆる停戦体制というかたちで一応、終止符を打ちました。ただ、これはあくまで法的な戦争の終結を意味する平和体制ではなくて、ただ単なる戦争を一時中断するという停戦体制でしかありませんでした。

しかも、朝鮮戦争が起こったことは、東アジア全体で見ると非常に重要な影響を及ぼしたといえるかと思っています。朝鮮戦争が勃発する以前、アメリカは、もう台湾に中国共産党が侵攻してもやむを得ない、換言すれば、アメリカは蒋介石政権を助ける気持ちはなかったんですね、ほとんど。

しかし、朝鮮戦争が起こることによって、アメリカは台湾を守るべきだということで、台湾海峡を封鎖して第7艦隊を派遣します。そして、それ以後は台湾を守るということになり、現在の台湾問題が残るわけです。

私は台湾問題に関しては、屈折した思いがあります。一つは、朝鮮戦争が起こっていなければ、換言すれば、アメリカが朝鮮戦争に介入しなければ、台湾は中国のものになっていただろうと私は思います。

ただ、今の時点で、中国が言うように「1つの中国」だから台湾は中国の思いどおりにしてもいいんだとは全く思いません。台湾は台湾なりに、非常に立派な資本主義、立派な民主主義の国をつくり上げてきたわけですね。私は中国と台湾を比べれば、台湾の体制のほうに親近感を、非常にパフォーマンスの良さを感じます。したがって、台湾が中国のような体制になってしまうことには、率直に言って耐えがたいものがあります。

南北の分断をもたらしたグローバルな冷戦は一応、1990年を前後する時期に終わったわけですが、それが南北の分断を克服したということには少なくとも至らなかったわけですね。

私は、それまでは南北が体制競争して勝ったほうが主導して朝鮮半島の平和共存とか統一ということを進めていくと、こういう点について南北はある種の暗黙の合意があったと思います。どちらが勝つのか、どちらが優位を占めるのかについては、それこそ自分たちのほうが優位だということがあったと思います。しかしながら1990年以降になるとそうではなくなったわけですね。体制競争における敗者である北朝鮮が、いかに自分の体制を生存させるために、全くそれまでとは別のゲーム、すなわち北朝鮮の体制生存ゲームを始めることになります。しかも韓国ではなくてアメリカを相手に、そのゲームを行うということになります。

したがって、冷戦が終わって韓国が体制競争で優位を占めたけれども、南北の分断体制には何ら変わりはない。非常に逆説的ですが、冷戦時代よりも今のほうが朝鮮半島の軍事的な緊張は高まっているといえるかもしれません。実際、現状はそうですね。

さらに、これは昨年からの話ですが、ロシア・ウクライナ戦争が起こり、さらにはここ10年ぐらいですが、

米中の対立が非常に深刻化すると、その中で北朝鮮の核ミサイル開発が急速に進む。そういう状況が、私たちの目の前に表れています。

もちろん、韓国も政権が代わる。進歩の文在寅（ムン・ジェイン）政権から保守の尹錫悦（ユン・ソンニョル）政権に代わったわけです。その下で、韓国の外交も変わることで、どうも【日・米・韓】対【朝・ロ・中】の旧冷戦時代を彷彿させるような構図が復活しているのではないかということすら感じます。

もちろん私はそれがいいこと、それが望ましいことだとは全く思いません。しかし、もしかしたら、また元に戻るのかな、私たちが一生懸命、冷戦が終わってからいろいろなことをやってきたことは一体何だったのかというように思います。これは恐らく日本以上に、韓国の人たちが一番感じていることではないかと思っています。

2 朝鮮半島に課される制約②：植民地支配・分割占領

2番目としての制約は、これはいわゆる外国による支配、占領を経験したということであり、日本の植民地支配であり、米ソによる分割占領です。

ただ、その結果、韓国、北朝鮮は米ソの軍事経済援助を受け取るわけですね。それから韓国は1950年代、アメリカの軍事経済援助に全面的に依存していったわけですし、60年代に入ると、それに代わるというかたちではなく、それに加えるというかたちで日本との経済協力が行われるようになります。

ただ、韓国では、日本との関係が強まるということに対する警戒感が残っています。今現在、例えば日本と韓国の軍事費（日本では防衛費、韓国では国防費と言いますが）は同じ水準です。にもかかわらず韓国では、いまだに日本の軍事大国化という話、さらには朝鮮半島に日本の軍隊としての自衛隊が上陸するという話が、警戒感をもって語られる側面があるんですね。

それから、さすがに今は韓国経済が日本経済に従属しているというようなディスコースはほとんど聞かれなくなりましたが、少なくとも1980年代までは、経済的に日本に従属しているというディスコースがものすごく強かったわけですね。

それから1950年代までは韓国よりも北朝鮮のほうがオープンな社会だったと思います。例えば、中国やソ連、それから東ヨーロッパの社会主義兄弟国の支援を積極的に受け入れる、そういう国であったわけです。しかし、次第に中ソから自立するということで「自力更生」という言葉を頻繁に使うようになり、そして、「主体（チュチェ）」を強調するようになります。

そしてパフォーマンスとしては1960年代までは経済力、それから軍事力においても北朝鮮のほうが相対的に優位であったわけですが、70年代に入ると拮抗（きっこう）し、80年代以降は韓国の優位が決定的になり、韓国は先進国、援助国になりました。そして、日韓関係も、それまでの非対称、垂直的な関係から対称的、水平的な関係へと変わっていくことになるんですね。

3 朝鮮半島に課される制約③：地政学

3番目の制約としては地政学というものがあります。朝鮮半島の人たちから見ると、このように世界が見えるわけです。自分たちをアメリカ・中国・ロシア・日本という大国が取り囲んでいるということです。「4大国」という言葉がしばしば使われます。そうした4大国とどのような関係を構築して、その関係に起因する制約をどのように克服して、機会をどのように利用するのかというイメージです。

その結果として、そうした大国間の関係、それから大国と小国の関係に起因する制約をいかに克服するのか、もしくはやはり制約を受けざるを得ないのか、そういうことです。

アメリカとの関係で言えば、韓国はアメリカから軍事経済援助をもらっていたわけですし、現在に至るま

で駐韓米軍が存在しているわけです。北朝鮮の場合には中国、ソ連の軍事経済援助はありましたが、中国の人民志願軍は、今はもう撤退しています。

それから、日韓国交正常化に伴って日本の対韓経済協力が行われるということになります。日本と北朝鮮の国交正常化は、いまだに未完です。私は、どう考えても日本と北朝鮮の国交が未だにないというのは、おかしいと思います。私はべつに北朝鮮という国がいい国だとか、そういうことを言うつもりは全くありません。日本は悪い国とも付き合っているわけですよ。世界中のいろんな国、独裁国家とも付き合っているわけです。

しかし、北朝鮮だけとは国交がない。しかも日本には、北朝鮮を祖国と見なすような人たちが少なからず存在するわけですよ。私は無条件で北朝鮮と国交正常化をして、北朝鮮に経済協力をするべきだということには思いません。北朝鮮が日本を脅かすような核ミサイル開発をしているわけですから、そうした北朝鮮に日本からの経済協力がいくということはある得ないと思いますが、少なくとも国交正常化に向けた話し合いを行わないことをおかしいと思わない感覚は問題だと思います。

現在、北朝鮮に対する韓国の優位は確立されたわけです。そして、中国は近代化して大国になります。日本にとってもそうですが、特に韓国とか北朝鮮にとっては、これは機会であると同時に制約にもなっています。

さらに、アメリカと中国の対立が深刻化し、「米中新冷戦」という状況が出現します。「新冷戦」という言葉を使うべきでないということをおっしゃる先生方は多いと思います。「新冷戦」という言葉を使った途端に、新冷戦になってしまうからだという事のように。

しかし、私はそれまでの経済とか軍事だけの問題が、最近は技術とかイデオロギーの問題にまで、どんどん波及するようになってきているわけですので、かなり全面的な対立へと広がっていると思います。

ただ、韓国では「米中対立」「米中新冷戦」という言葉は使いたがらないですね。「米中戦略競争」「米中覇権競争」のような、競争という言葉を使うことが好まれているようです。やはり、米中関係が対立というようなことにはなってもらいたくないという含意があるのだと思います。

北朝鮮は体制競争の優位を放棄する、そして自体制の生存を優先させるための核ミサイル開発に邁進するということになっているんですね。北朝鮮の論理はわかるとしても、それが地域の安保環境をかなり決定的に悪化させる。そして先ほど言ったように、その結果として旧冷戦期の「同盟」「陣営」が復活する兆しも見られているわけですね。

そして結果として見ると、韓国と北朝鮮は現状ではやはり非対称になっているわけですね。では、なぜ、こうした非対称性がもたらされたのかということですが、確かに一方で外的な制約、機会が質量共に異なっていたという側面があると思います。

韓国に対する日米の協力というのは分業を通した、主に軍事分野に関してはアメリカ、経済に関しては日本というような分業を通した協力を行うということで、ある種、調和的な協力が行われたのに対して、北朝鮮にとって、中ソが対立をすることは、一致団結して北朝鮮を支援するということにはならなかったわけですね。

ただ、これは北朝鮮にとって不利な状況ばかりではありませんでした。中ソが、どちらか一方だけが北朝鮮から離れていくことを防止し、さらには競争的な支援をさせるということにもつながったわけです。

4 南北朝鮮の異なる選択

それから2番目としましては、そうした外的な制約を克服する、もしくは外的な機会を利用するための政策選択にやっぱり違いがあったのではないか、その結果がこういう実績の違いにつながったのではないか。

この点はやはり非常に重要だと思います。

韓国の場合、「依存を通じた発展」と表現しましたが、いわゆる国際社会、国際経済との関係を密接にすることによって発展を達成した側面が強いと思います。もちろんそれによって自分たちが制約を受けるというリスクは大きくなるわけですが。しかしながら、それによってもたらされる機会を活用することもできるわけですね。リスクだけれども、機会もある。韓国はそういうリスクを取りながらも、機会を積極的に利用することで、今日の経済発展を達成して先進国の隊列に加わったわけです。私は、そういう意味で韓国の選択というものも非常に重要だったのではないかと考えます。

それに比べると北朝鮮は、殊更に「自力更生」、自分の力でやるのだと、あまり外からの制約は受けたくない、受けたくないということを重視するわけです。それは制約を受けないという意味ではよかったのかもしれないが、国際社会から得られるような機会をあまり利用できなかった、そういう側面もあったと思うんですね。

北朝鮮に関する表現、強いて挙げれば、私は孤立した South ということが最も適切かと思います。「Global South」という言葉はよく使いますが、北朝鮮の場合には South だけでも Global でも何でもなくて、非常に孤立した South に過ぎない。ただ、軍事力は突出して核保有国になったという状況はあるわけですね。

5 南北朝鮮の異なる体制

第3に、そういう外的な制約を克服したり機会を利用したりするための内的な条件、体制にどのような異同があったのか、という問題です。私はある時期までは韓国も、北朝鮮も非常に似た体制であったと考えます。それはざっくり言うと開発独裁体制、つまり経済発展のためには独裁が必要なのだ、そういう体制なのです。

しかし、私は南北で違ったのは、指導者、より具体的に言えば、韓国の1960年代・70年代の近代化を担った指導者である朴正熙と、同時期北朝鮮を担った金日成の違いということです。朴正熙に対しては、批判が韓国の中であることは承知しております。独裁者だということです。しかし、私は朴正熙ってなかなか傑出した人だったのではなかったかと今は思っています。

なぜか。朴正熙は軍人出身でした。彼は日本が作った傀儡国家である満州国の満洲国軍官学校を卒業して満州国軍人になったわけです。満州国の軍人って何かといえば、大日本帝国の帝国軍人ですよ。だから彼のものの考え方は大日本帝国の軍人としてのいろんなエトスをものすごく持った人であったわけです。

そういう指導者であったわけですが、ただ、面白いのは、彼は、韓国の安全保障をアメリカとの同盟に任せる、そして、自分たちの限られた資源を軍事よりもむしろ経済に優先的に振り向けるんだと、かなり徹底したことをやった人だと私は思います。

その端的な例が、1960年代のベトナム派兵でした。自分たちの安全が脅かされているのに、自分たちの軍隊の1割をベトナムに派兵したわけですよ。アメリカ軍にずっと韓国にいてもらうために派兵したわけです。その割り切り方は、私はなかなかできないと思います。

それに対して北朝鮮は、安全保障は自前でやっぱり確保しなければいけないと考え、従って限られた資源を軍事に優先的に振り向けるということをやりました。北朝鮮が掲げた、四大軍事路線とか、最近で言えば先軍政治、並進路線と呼ばれるものがありますが、これもすべて軍事に優先的に資源を振り向けるということです。私は、こういう違いが、今になって相当に響いてきていると思います。

さて、一応歴史の話なので、これからは、時代ごとにどういうふうに変わってきたのかということを見ていきたいと思います。2つの時期に分けて考えたいと思います。

Ⅱ 朝鮮半島の現代史の展開

一つは、まだ韓国と北朝鮮が体制競争をやっていた、体制競争というゲームを共有していた、そういう時期です。これが大体1990年ぐらいまでです。

ただ、その中でも先ほど言ったように①1950年代、60年代の北朝鮮のほうが体制優位であった時期と、②70年代の拮抗する時期、それから③80年代に入ってから韓国の体制優位の時期、この3つぐらいに分けて考えることができます。

それから2番目の時期としては、この韓国と北朝鮮、みんなそれぞれ掲げる目標が乖離した時期です。韓国は体制優位に基づいて北朝鮮に対する、いわゆる軍事挑発を抑えたり北朝鮮に関与を深めたりしようとしています。ここではあえて「統一」という言葉を使わずに、括弧付きの「統合」という言葉を使いましたが、そういうことを指向するわけですね。

それに対して北朝鮮は韓国と体制競争して勝つ、優位を占めるという目標をもう既に放棄していると思います。そうではなくて、いかに今の体制を存続させるか、そういうことを優先して考えています。そのために核ミサイル開発に邁進し、さらにそれをもってアメリカとの交渉を進めるということになるわけです。

ただ、この時期に関してもアメリカと韓国の対応が北朝鮮を無視するのか、抑止重視なのか、それとも限定的な関与なのか、積極的な関与なのか。それから北朝鮮の対応はそれに対するレスポンスという側面がありますけれども、無視して軍事挑発を行うのか限定的に呼応するのか、積極的に呼応するのかということになるかと思いますが、大体この6つぐらいの時期に分かれているということになるかと思います。

私は一番やっぱり希望があったのは、米韓が積極的な関与を行い、北朝鮮が積極的に呼応した2000年前後の時期と2018年の、ほんの一瞬の時期だったと思います。

ただ、そうした時期はなかなか持続しがたいという側面があるわけですね。現状は、米韓は無視をし、抑止重視であるのに対して北朝鮮も同じく無視をして軍事挑発を行う。あるいは一番リスクな時期ですね。

1 南北の体制競争

① 北朝鮮の体制優位：1950・60年代

そういう区分に従って見ていきますと、まず、北朝鮮が優位であった1950年代、60年代は、米ソ冷戦プラス米中冷戦があり、そして南北の分断体制の下で【日・米・韓】対【北朝鮮・ソ連・中国】という陣営間の対立が成立していたわけで、そのピークは朝鮮戦争であったわけです。

しかし、1960年代に入ると次第に中ソ対立が激化することになります。それから日韓国交正常化交渉が本格化する、そして妥結をする、日本もそこに加わることになるんですね。その前では括弧付きの関与にとどまったわけです。もちろん朝鮮戦争に関しても、国連軍の出撃基地になったのはGHQ占領下の日本でしたし、朝鮮戦争遂行のための兵站基地になることで、日本は実質的に相当に関与したことは確かです。最近の研究で言えば、もう実際に米軍について行った日本人の米軍基地従業員なんかもいたわけですね。

1960年代、ベトナム戦争が本格化し、韓国は派兵をする。日本も協力をする。そして、その結果、当初の北朝鮮の政治・軍事・経済における優位であった状況を、韓国が挽回して追い上げていく状況が60年代に生まれるわけですね。

第二次世界大戦の戦後処理を巡る連合国の構想の下で南北が分断をされるということになるんですね。そして、その結果、朝鮮戦争が起こることになります。朝鮮戦争は一応、こういうふうなプロセスを経て展開をされているということになるわけですね。

ただ、朝鮮戦争に関しては現在いわゆる戦争の公的な終結を意味するような平和協定は、まだ依然として結ばれていないわけですね。それは一つ大きな課題なわけです。やっぱり、ただ単に停戦協定という非常に不安定な状況でしかないということになるんですね。

1950年代の韓国は、李承晩（イ・スンマン）政権であったわけです。李承晩政権はある程度の強さを持つ野党が存在するわけですが、恒常的な不正選挙などに起因して政権交代の可能性がほとんどない、そういう体制であったわけです。

それから経済としてはアメリカの援助に依存しながら、戦後復興を行う。政府が経済復興、戦後復興を指導するという側面があったわけです。ただ、同時期、北朝鮮に比べるとやはり経済的なパフォーマンスは劣っていたという側面があります。それから政治的な腐敗に起因して政治的にも不安定だった。優位な北朝鮮に、どういうふうに対応するのかという課題を抱えていた頃ですね。

それに対して1950年代の北朝鮮は、当初は左派の連合政権だったわけですが、それが50年代の一連の状況を利用することで金日成が率いる満州派の独裁政権へと変わっていきます。

それから、戦後復興の過程では重工業を優先する。そのために中ソとか社会主義兄弟国による支援を積極的に受け入れるということになります。その結果、韓国よりも優位な軍事・経済・政治的な発展を確保するということにはなるんですね。

それが1960年代に入ると、韓国は大きく変わります。4・19革命によって李承晩政権が打倒され、そして61年の5・16軍事クーデターによって朴正熙政権が成立します。

朴正熙政権は政治体制としては李承晩政権とかなり似た側面があるわけですが、しかし経済に関しては米国の経済援助、それを補完するものとして日韓国交正常化に伴う日韓経済協力によって、労働集約的な軽工業の輸出指向型工業化と資本集約的な重化学工業の輸入代替工業化とを複線的に進めるということになるわけですね。

ただ、安保における不安もあるわけです。1960年代、アメリカの韓国に対する軍事的な関与というのが不透明な状況に直面すると、韓国は、まずはベトナム派兵によってアメリカ軍を韓国に駐留してもらうことを選択するわけです。しかし、にもかかわらず70年代になるとアメリカの韓国に対する軍事関与はさらに不透明さを増す状況になります。

同じ時期の北朝鮮は、国内において満州派による独裁が完成し、さらに韓国に対する優位が確保される、そういう面では一番いい時期だったわけです。しかし、次第に中ソ対立が顕在化します。それから韓国の経済的な追い上げがかなり可視化します。そういう状況の下で限られた資源を軍事に振り向けざるを得ない、そういう状況ですね。そして、その下で自らの体制を正当化するためのイデオロギーとして、主体（チュチェ）思想というのが出てくるということです。

② 体制拮抗：1970年代

それが1970年代に入りますと、大きく国際関係自体も変わるわけですね。米ソのデタント、それから米中の接近、和解で日中の国交正常化になります。南北朝鮮にとって、こうした状況変化をどのように認識するのか、そして、どのように対応するのか、非常に複雑だったと思います。

一方で、大国間の国際政治が変わっていくわけですから、それへの対応を迫られるということになります。しかし、他方でそうした大国間の国際政治に自分たちが翻弄されたくない、これは韓国も、北朝鮮も共通していたと思うんですね。さらにもっと複雑なのは、ちょうどこの1970年ぐらいに韓国と北朝鮮の広義の力関係が次第に均衡してくるのです。

例えば、経済力、軍事力に関しては北朝鮮が優位であったのが、韓国が追い付いていく。それから国際

社会におけるプレゼンスに関しては、60年代までは相対的に韓国のほうが優位だったと思います、アメリカの力を借りてですね。ただ、やっぱり中国が台頭してくる、それに便乗して北朝鮮のプレゼンスも上がってくる。そうすると、ちょうどこの時期はやっぱり南北の関係がかなりパリティーになる。

それまでは、韓国は北朝鮮に関しては不利だったわけですから、直接交渉は不利だという認識です。したがって、国際社会、例えば国連みたいなどころでの優位を誇示しようとした。北朝鮮は、これはアメリカ軍が韓国から撤退するということが前提条件ですが、南北で直接に交渉するということのほうがいいと考えていました。ところが、国際社会におけるプレゼンスでは、少し劣勢だったわけです。

しかし、この時期になると、ちょうど関係がパリティーになってくると、南北双方とも直接交渉もやり、国際社会においても本格的な競争をやるということになるんです。

だからこそ、70年代の初めに、いわゆる南北対話というものが一瞬始まったわけです。しかし、一瞬始まったんだけどやっぱり決定的な違いがあって、それは持続しなかった。その決定的な違いというのは、韓国は、朝鮮半島には2つの Korea が存在するんだと、だからそういう状況への対応を優先させるべきだと考えたわけです。それに対して北朝鮮は、いや、そんなことはないんだ、2つの Korea を認めるということは分断を固定化させることだから、それは認められないと、あくまでも One Korea だと、そういう違いがあって結局、南北の平和共存が70年代には定着をしなかったという側面があるんですね。

70年代、韓国の政治が大きく変わります。それは72年に維新体制が成立することで、これは全く今までではそれでも形式的に政権交代の可能性とか、ある程度の自由化というものも存在したけれども、もう維新体制の下では朴正熙の半永久的な政権が保障されるということになります。

その下で、経済に関しても重化学工業化を積極的に進める。その重化学工業化はいわゆる防衛産業の育成ということにもつながるわけですね。そして外交政策に関しても、それまでの自分の体制のほうが劣っているということを自覚した国連依存から、北朝鮮と交渉しないというかたちから、北朝鮮と直接交渉する可能性を開くという方向に変わります。

ただ、やはり2つの Korea 政策を掲げるわけですね。つまり南北で国連に同時加盟してもいいじゃないかと。それからクロス承認、日米が北朝鮮を承認し、中ソが韓国を承認する、それもいいじゃないかと。それからハルシュタイン原則と呼ばれる、つまり韓国は北朝鮮と国交を持っている国とは国交を持たないと言っていたわけですが、そういうことも放棄するということになるわけですね。

それから北朝鮮も、ほぼ同じ時期に憲法改正をして金日成の個人独裁が完成され、そして金正日への後継体制の布石が打たれるということになります。ただし、経済的にはこの時期、厳しい状況でした。外資の限定的な導入を行うわけですが、それが累積債務問題などもあって挫折します。その結果、老朽施設の更新がなかなか進まないという状況になりますね。

この時期に、もし北朝鮮が2つの Korea 政策に踏み切っていたら、韓国は2つの Korea 政策を取っていたわけで、この時期にクロス承認も行われたら、南北の国連同時加盟も行われたはずですよ。

北朝鮮が今求めていることは、基本的にはクロス承認なわけですよ。日米との国交正常化を北朝鮮は求めているわけですが、この時期にもし北朝鮮が2つの Korea 政策を選択していたら、今みたいに、こんな苦勞をすることはなかったんじゃないのかなというふうには思いますよね。

この背景にあるのは、北朝鮮は、まだこの70年代の時点では、韓国で維新体制に対する反対運動が盛り上がり、ある種の政治変動が起きるんじゃないか、そうしたら、新しい政権は自分たちとの関係を強化するほうになびくんじゃないか、そういう期待があったのではないかなという気がします。

③ 韓国の体制優位：1980年代

それが1980年代に入っていきますと、デタントから、いわゆる新冷戦。さらには新冷戦から冷戦の終焉へということで大きく変わってきます。韓国は持続的に発展をし、それから北方外交、経済を手段として外交関係の拡大ということを行っていきます。それから、87年の政治的な民主化ということも達成するというようになっていきますね。

帰結として見ると韓国は確かに政治的な混乱、朴正熙の殺害、それから12・12クーデター、光州民主化抗争の弾圧等があったわけですが、結局は民主化ということに成功するということになるんですね。

それに対して北朝鮮は、韓国に対する体制の劣勢は非常に顕著なものになるわけです。韓国との経済的な格差は拡大し、外交的な孤立が増します。それから、韓国のいろんなことを妨害するためのテロ行為というものも行われる。それが北朝鮮の威信を、さらに低下させるということにもなるんですね。

では、なぜ南北の不可逆的な逆転が起きたのかということですが、最初は北朝鮮のほうが優位であったとしても、そんなに顕著なものではなかったというふうに思います。

一つには日米の対韓支援と、中ソの対北朝鮮支援とが違ったという側面。それから南北の政策選択の違い、これは先ほど言ったように韓国は国際社会との連携を深めるというリスクを冒しながら、その機会を最大限に利用すると、そういうことを行った。その成果を、うまく利用することができた。

それに対して北朝鮮はできるだけ制約を受けたくない、自立を強調したと。そういう面では一貫していたわけですが、その結果として国際社会が提供するような機会を利用することができなかった。さらには、韓国と体制競争していたということ自体が、そういう国際社会の機会を利用するという選択を、より一層困難にさせたという側面があるのかと思います。

2 北朝鮮の体制生存優先と韓国の対応

それが第2の時期になると、「異なる目的を持つ南北関係」ということになるのです。韓国は体制優位を背景に、南北の枠組みに北朝鮮をいかに取り込むのか、それによって北朝鮮への影響力を強めて韓国主導の平和共存、統一をいかに達成するのかということを目的とするわけですね。

それに対して北朝鮮は、もう南北体制競争における優位を占めるということは放棄する。その代わり自体制の生存を最優先課題とする。そして、そのために最大の脅威となるアメリカに対する抑止力を確保するために核開発を行った。さらにアメリカからの国家承認を求める交渉を可能な限り対等な立場で行うためにも自らの核兵力、それからミサイルというものを開発しようとすると、そういうことになるんですね。

ただ、近年ではいったん開発した核兵力を、アメリカとの関係のみならず韓国や日本など米軍基地が存在する国を対象とすることも考えるようになってきていることは確かだと思います。そういう意味では、北朝鮮は戦略的には一貫性を持っている。

ただ、米韓の対応に応じた戦術的な変化もあって、これは基本的に言えばアメリカ、それから基本的には韓国もそれに従うということになるわけですが、アメリカが積極的な関与、それから限定的な関与を示してくれれば北朝鮮もそれに対して呼応すると。

しかしながらアメリカ、韓国が無視、それから抑止に重点を置くという政策を取ると、それに対して無視をして、さらには軍事的な挑発によって、むしろ逆に相手の関心をより一層買うということを考えるようになるわけですね。

韓国は、基本的にはアメリカとの歩調を合わせます。ただ、時期によっては例えば金大中（キム・デジュン）政権、文在寅（ムン・ジェイン）政権はアメリカに対する説得を試みて、アメリカに何とか韓国が考えるような関与政策に加わってもらおうと、そういうことも行っているんですね。

日本の場合には、私は小泉訪朝の2002年ぐらいまでは、北朝鮮にとって日本というのはかなり重要なリソースを提供してくれる存在であったと思います。しかし、その後の展開は日本の北朝鮮外交の硬直性に伴って、なかなか北朝鮮から見ると日本は何をやっても仕方がないということになるわけですね。

それから中国は、北朝鮮の核武装は好ましくないとは思っていると考えますが、あえて強い圧力を行使して抑えるということもしない。2010年代ぐらいまでには中韓の経済関係の深まりもあり、南北の等距離外交を志向したが、しかし米中対立の激化、それから韓国の政権交代などもあって北朝鮮の存在意義が相対的に上昇する。そして最近では、どうも北朝鮮重視の外交に回帰しつつあるのかなというふうに思います。

ロシアは、現在はロシア・ウクライナ戦争の勃発に伴って、北朝鮮はロシアを全面的に支持してくれる数少ない国の一つです。従ってロシアが北朝鮮の核ミサイル開発を抑制するということは、恐らく難しいだろう。

だから実際に北朝鮮のミサイル発射に伴う国連安保理決議違反に関して2022年5月以降は、いわゆる中ロが拒否権を発動して新たな非難決議は成立していない状況です。果たして北朝鮮が第7回目の核実験を行った場合にも、これと同じ状況が続くのか、それともやっぱり核実験は、これは駄目だということになるのか、ちょっとこれは見る必要があるかなというふうに思います。

① 限定的関与と北朝鮮の呼応：1990年代

まず、最初の時期は1990年代の時期。この時期は、米韓が限定的な関与政策を行って北朝鮮も、そこに部分的に呼応していた時期です。

ただ、その中でもやっぱり危機はありました。これは第一次クリントン政権の時期、大体1992年から93年にかけてですけれども、アメリカが北朝鮮の核関連施設に対してピンポイント攻撃を、surgical strikeをいわゆる外科手術的な行為、それを行うんじゃないかということ。しかし、その結果としてジュネーブ枠組み合意が94年に出ています。まず、これが1つの時期ですね。

② 積極的な関与と北朝鮮の呼応：2000年代初頭

それから、2番目の時期は2000年を前後する時期で、この時期は先ほど言ったような、いわゆる米韓がかなり積極的な関与政策を行って、これは日本もそれに協力をしたわけですね。ちょうど日韓パートナーシップ宣言の時期です。北朝鮮も、それに対して積極的に呼応する。その結果として2000年の6月には、南北首脳会談が行われるわけですね。それから米朝関係も進展する。

今から考えると本当に金正日がアメリカに行く、それからクリントン大統領がピョンヤンを訪問するという可能性も、かなり議論されたという側面がある。それから日本だって小泉訪朝に伴って日朝関係、日朝国交正常化にドライブを掛けようと、そういう時期だったんですね。

③ 限定的関与と6者協議：2000年代

ところが、これが主にアメリカの政権交代によって変わります。それでも2000年代はいわゆる米韓は6者協議というかたちで限定的な関与を行い、北朝鮮もそこに参加して一応、限定的な呼応をするということになるわけです。

しかし、ある時期までは進むんだけど、例えば2005年9月、6者協議で共同声明が出されて、北朝鮮の非核化に対する合意ができて、そのために何が具体的に必要なのかということに関する議論は進むわけですが、結局その一方で北朝鮮は核実験を実施する。アメリカは北朝鮮に対する金融制裁を新たに加えるということで結局、このプロセスはうまくいかなかったですね。

④ 無視と軍事挑発の累積：2010年代

その次の時代、2010年代というのは、全くお互いに見え無視する時期で、北朝鮮の軍事挑発だけが、どんどん既成事実化します。この時期、北朝鮮は、核実験を繰り返し、南北で積極的に積み上げられてきた南北の協力事業も行われなくなります。

日朝関係についても部分的な進展はあったわけですが、結局は何も進まない、そういう状況です。そして、ついに2017年にアメリカでトランプ政権が登場すると非常に危機が高まる。アメリカでは、この時はbloody nose operation（鼻血作戦）と呼ばれるような軍事的な手段の行使を、相当程度考えるということになるんですね。

⑤ 積極的関与と北朝鮮の積極的呼応：2018年

2018年、非常に短い時期でしたが、北朝鮮の非核化を巡って韓国の文在寅政権が仲介役を担って、米朝交渉が一瞬進展する可能性を示した、そういう時期もあったんですね。

新年の金正恩（キム・ジョンウン）の演説から始まり韓国における呼応、特に平昌オリンピックに参加させる。そして板門店で南北首脳会談を4月に開催。6月にはシンガポールで米朝会談が開催される。さらに9月では平壤で南北の首脳会談が開催され、軍事分野の合意が。これは軍事分野の合意というのは実質的には、南北の不戦宣言だというふうに思います。

⑥ 没交渉と軍事的緊張の高まり：2019年以降

しかし、2019年2月のハノイの米朝首脳会談が何の合意もなく決裂をする。そうすると結局は、それ以後はお互いにまた没交渉な状況で、北朝鮮はまた核ミサイル開発を再開するという状況になるのです。

そしてコロナの問題も。現在は、もう一回コロナから脱するかたちで、北朝鮮は最近、食糧事情もかなり良くないということなんで、まだ不安定な状況が続くみたいですが、現状としてはお互い無視して軍事挑発を続けるという状況が現在に至るまで続いている状況ではないかなというふうに思います。

Ⅲ 日韓関係の現在

最後に、私は尹政権、それなりの期待はしているわけですが、尹政権になってから文政権とはかなり違う北朝鮮政策を採用する。日本、アメリカと接近する。それから米中対立への対応においても、文政権はあれほど嫌がっていた「インド太平洋」という言葉を尹政権は、「韓国版インド太平洋戦略」ということを使うことによって、かなり踏み込むことができますね。そういうことによって接近をする。

そしてアメリカとの同盟関係においても接近を図っていくと。その結果として尹政権としては、こうした外交的な課題、安保課題に対応するためにも日韓のより一層の協力が必要だと。そのためには、その協力を阻害している、いわゆる元徴用工問題に対する懸案に関する妥協を模索する必要があるんじゃないかということで、ちょうど昨日のような妥協案が出てきたという側面があるかなと思います。

ただ、韓国では、この解法自体がやっぱり韓国の多くの人から見れば「日本に負けたと、屈辱的だ、何で俺たちだけが一方的に譲歩しなきゃいけないんだ、日本は何の譲歩もしていないじゃないか」と、そういうふうに受け止められるわけです。

私は韓国のメディアからの取材には、「もちろんそう考えることもできるけれども、やっぱり日本に比べて韓国のほうが大人になった、大人になって大人の対応をしたんだ、むしろ子どもの対応に終始したのは日本じゃないか」と、そういうコメントをしておいたんですが。ただ、そうはいっても、なかなかそのように

は受け入れられないかなというふうには思います。

それから、もっと根本的な問題としては、韓国としてはこうした北朝鮮への対応、米中への対応、アメリカの同盟関係を強化するということに対して、尹政権のような方向でいくしかないんじゃないかと私も思います。そのためには日韓の協力も強化していく必要があるんだろうと、私は思います。

しかし、このまま進んでいけば日本も韓国も安全になるのかと、私はそうは思いません。やっぱりある時点で北朝鮮に対しては抑止だけではなくて関与の政策も必要だし、それから米中対立になって米中対立がエスカレートすればするほど日本や韓国が安全になり繁栄するわけでは全くないです。むしろ危険になる。

そういう状況の中で、日本と韓国がもう少し協力をする事で米中対立のはざまで、どういうふうに自分たちの居場所を確保していくのかということに対する協議を進める必要があると思うんです。

私は、そういう意味で言えば韓国の外交に対しても、もう少し今の尹政権だけではなくて尹政権以外の、例えば今の野党も含めた韓国外交と日本がどういうふうに付き合っていけるのかということを考える、そういう方向で進むべきなんではないかなというふうに考えています。

10分ほどオーバーしてしまって申し訳ないですが一応、日韓関係については、ちょっと今回は後の付け足しということで加えたので、もしご質問があれば答えますが、これで終わらせていただきたいと思います。どうもご清聴、ありがとうございました。

元兼：木宮先生、ありがとうございました。

先生のご著書では日韓関係の全史で、19世紀末からのものもありますが、今回は戦後ということでした。ただ戦後といっても、もう78年という、その長い期間を1時間ということをお願いしてしまったので、ちょっと反省しています。

大学が、われわれは90分授業とか、もう東大でも90分ですかね。長いスパンで話すことに慣れておりますけど、端折っていただきまして、また必要あれば質疑の中で補足をお願いしたいと思います。

では、これより指定討論者として同じく九州大学韓国研究センターの副センター長であります出水教授よりコメントをお願いしたいと思います。

出水（韓国研究センター副センター長）：ありがとうございました。

冒頭、木宮先生に私たちの共同研究について意図を解説してくださったわけですが、これまで歴史とは一国のナショナルな歴史であるという前提に立ち、それを束ねたものが世界の歴史なんだ、人類の歴史なんだという話だったわけです。しかし現在、私たちが同じ問題、例えば気候変動など、一つの国を単位に考えることは無理になってきている。その中で、グローバルヒストリーが出てくるわけですね。

そうすると韓国と、例えば日本語を使う私たちが相対する時は2国間関係みたいな話になりがちなんですけれども、そうじゃなくてやはり人類史を考えないといけない時代の中に、これを置いてみるとどうなるか。そのことについて木宮先生ご自身の研究の出発の動機付けとの関連で補足していただいたことは、非常にありがたかったと思います。

ただ、他方で私も政治学者で木宮先生の今日のお話の、ある種ご苦労はよく分かるわけですが、どうしても今日のお話のように国家間関係、国際関係というかたちに話がいつてしまうとグローバルヒストリーで、一国的なものの方、国際関係系の方を相対化するところには、なかなか難しさがあります。

私どもは九州大学の韓国研究センターだし、九州韓国研究者フォーラムである。そういった意味では、まさに九州大学は福岡、九州にある。東京および東京と相似形であるソウルから見えるような国家を中心としたものではない関係性というものを、何とかして考えたいと思っているわけですね。

もちろん国家間関係、政府間関係はなくなるわけではありません。が、しかし他方でより広い関係性の中で考える時、あるいはもっと私たちの目線に近いところで考えるということも加味した上で、この共同研究は行っていきたいなというふうに考えているところです。ちょっと余計な前置きかもしれませんが、それを確認した上で一点ご質問したいことがあります。

「朝鮮戦争」は、今日のお話の中でも非常に重要な柱だったと思いますが、要するに終わっていない戦争です。私たちは「朝鮮戦争」と呼んでいますが、その戦争の内実は、南北戦争・米朝戦争・米中戦争であるわけです。この中で全く関係の改善、進展が見られていないのが米朝戦争であるというふうに言うことができると思います。つまり南北戦争に関しては、今日のご報告の中にあったように積み重ねていって平和共存という可能性について、そして緩やかに統合していくという合意は恐らく南北間にできていて、現在南北が相互に相手に対して軍事先制攻撃を行おうという意図や動機は、ほぼ考えにくい状況になっていると思います。他方で、今日のご報告の中にあったように米中戦争に関しても70年代に劇的に米中が和解する過程の中で、いったんは棚上げされた。ただし、今現在は新しいかたちで米中の緊張関係は生まれていますけれども、つまるところ非常に厳しい状況で残っているのが米朝戦争の後片付けであります。しかし、今日のご報告の中にあったように合衆国は特段、北朝鮮に対して関心を払おうとしない。他方で北朝鮮は体制の存続を懸けて何とか合衆国との関係を改善、つまり戦争状態を終わらせようとしている。

今日の最後の部分で6者協議が出ました。木宮先生のご著書の中でも指摘されている点ですが、6者協議というのはかたちを変えた中国が仲介する米朝交渉である。ところが6者協議が行き詰まっているということは、要するに最も朝鮮戦争の中、手付かずに残っている緊張状態、米朝戦争を解決するチャンネルが今現在、失われているという状態だと思います。しかも今日のご報告の中にもあったように、米中が新しい対立状況になっているということは、米朝の戦争を終わらせる仲介者の見通しが付かないということになります。

他方で、では私たちが所属する、この日本国が、むしろそういった文脈と全く離れて韓国や中国との緊張関係をいたずらに高めているような状態が、この間、続いてきたのではないか。福岡に暮らす私たちからしてみると、例えば朝鮮戦争の際に福岡空港が板付基地として出撃地になり、現に北九州には一時的にせよ灯火管制が敷かれたような経験もある。まさに、この緊張関係が直接的に私たちに降り掛かってくるはずなのに、私たちの政府はそういった問題を根本的に解決しようとするような動きを取ってこなかったと。

私が1点目に、ご質問したいのは要するに、かつて6者協議で中国が仲介者としての役割を果たし米朝戦争を終わらせようとした。それが今はなくなろうとしている時に、では日韓が共通の利害を持つ者として、そのような米朝の仲介者になり得るような可能性はないのかということを議論したいと思っているわけです。そのことについて、まず一点、木宮先生からコメントいただければと思います。

しかしながら今、私が申し上げたような日韓が共通の利害を持ち、そして米朝の仲介者になるというのは、徴用工の問題のようなことを考えると、なかなか実現は難しいだろう。ただ他方で、先ほど申し上げたように、私たちは東京やソウルの観点ではないアプローチを何とかして取りたいというふうに考えていて、このような研究テーマを掲げているところがあるわけです。

実を言うと私は先週、土曜日、日曜日、対馬市に行っておりました。対馬市の事業としてグローバル大学という事業を、この3年間やってきたわけですが、そこではグローバルではなく「グローバル」で。土日行った時に先週、対馬と釜山の航路が再開され、限定的ではありますが、既に多数の韓国人観光客の皆さんを厳原でも見掛けることができたわけです。例えば、こういったものの積み重ねの延長線上で、なかなか動こうとしない東京やソウルを変えていくことはできないのかというようなことを、私は私なりに考えたわけです。

少しこの話をナショナルなレベルに、木宮先生にお尋ねしたいということで読み替えますと、やはり日韓

が共通の利害を持とうとするといった時に、この今回の徴用工の問題もそうですが、1965年の日韓基本条約で構築されたものが、先生のご著書の中の所で言うと非対称的、垂直的な関係の時代のものであった。ところが今日、違う関係性が生じている中で、にもかかわらず、かつての65年体制の下で2国間の政府の擦れ違いが起きているのではないかと。これをどのようにつくり変えていくのか。日韓基本条約を結び直すというような大それたことはなかなか難しいとは思いますが、それでもかつての環境の中で行われてきた理解あるいは解釈、それに基づく運用ではなく、新たな理解・解釈・運用を積み重ねていかなければ日韓間の共通利害というものはできないというふうに思うんですね。そういった視点を持つ必要があるだろうと私自身は思うところが、あるわけですが、その点について、日韓関係について少し端折られたところがあると思うので、それも含めて伺いたいというのが2点目です。

木宮：出水先生、貴重なコメントをどうもありがとうございました。

まず1つ目の点ですね。確かに6者協議、中国が仲介した米朝協議で、こういう言い方をしているかどうか分かりませんが、中国が力不足というか役不足だったと思います。厳しい言い方かも知れませんが。

もちろん米朝自体にも責任があるわけですよ。ただ、要するに6者協議をやる時にアメリカとしては、とにかく中国にやらせてみようということがあったわけですが、やっぱりなかなか難しかったということでしょう。その背景には、中国ならば北朝鮮を何とか抑えてくれるんじゃないかと、そういう期待があったわけですが、どうもそうではなかったという側面があるんですね。

先ほど2018年、今度は、韓国が仲介をした米朝協議を何とかやろうとしたと思うんですね。ただ、この場合も文在寅政権は役不足というか力不足であったという側面があると思うんです。

さらに、これはもう少し歴史の検証を待たなければいけないところはあるんですが、日本、安倍政権はどうもこのプロセスをアメリカに働き掛けて、やっぱり妨害しようとしたのではないかと。その結果が、ハノイの決裂ということにもつながったのではないかとというふうに思います。

もちろん日本としては非核化が曖昧なまま南北、米朝関係だけがどんどん進むと日本にとって一番重大な、いわゆる非核化の問題がなおざりにされるんじゃないかという危機感があったことを、それなりに理解できますが、そういう側面があったわけですね。

その背景にあったのは、日韓間のコミュニケーションが全くできていないということがあったと思います。日本の安倍政権と韓国の文在寅政権の関係、本当に全然通わない関係、血の通っていない関係、それが5年間続いたということが、今の日韓関係に相当なボディーブローになっているという側面が私はあると思います。

そうした血の通わないような日韓関係の上に韓国が仲介役をして、米朝協議を日本が自らの理由で妨害したと、そういうプロセスがあるんですね。

私はいまだに考えるのは、確かにそれなりの理由としては分かるんですが、2018年の自分たちと、今2023年の自分たちがどちらのほうが安全なのかということを考えると、私は明らかに2018年のほうが安全だったと思います。今のほうが安全ではないですね。日本にとって日本なりの理由で妨害したというのは、それなりに私は理解できないことはないんですけど、でもその結果、日本の安全保障にとってプラスになったのかどうか、未だに自問自答します。

もちろん安全じゃないから国家安全保障3文書を改定して、それから反撃能力も持って、そういうことをやっているわけですね。私は、今の現状ではそれは必要だと思いますが。しかしながら、では2018年に何で、もう少し別の選択ができなかったのかと思います。

韓国の方に言いたいのは、なぜその時に日本との関係を置き去りにしたまま突っ走ってしまったのか。日本を説得して、日本を味方に付けるというのは難しいかも知れませんが、日本との関係を良くした上で、そういう北朝鮮に対するアプローチ、それから米朝関係、米朝の仲介役を、なぜしよとしなかったのか。こうした、日本への配慮を重視したのかしなかったのかという点で、明らかに2000年の金大中政権と、2018年の文在寅政権とでは、違ったと私は思います。

それから、2番目ですね。私の立場も実はちょっと揺れているところはあるんですが、1965年に結んだ日韓の関係を、これを否定するのではなくて、それを基に、それにいろいろなものを新たに付け加えることによって対応していくしかないのではないのかというのが、私の現状での結論なんですね。

よく日本の方でも、韓国の方でも、もう65年の体制は古くなって対応できなくなったんだということをおっしゃる方もいるのですが、では新しい枠組みで今の日本と今の韓国が合意できるか、私は悲観的です。

それを何とかするのが下からの市民運動なんだということかもしれませんが、私は正直言うと、こちらの九州とか福岡の市民運動の動きについては、それほど詳しくは知らないのですが、例えば今回の問題についても、もう少し日本の中で、いや、この問題について、もう少し韓国の被害者とか、韓国の主張にも、もっと、それをよく理解してあげてもいいのではないかと思います。

もちろん筋としては、韓国の司法判断と、日本と韓国との間の約束の間で、その両立を図るような何らかの案を韓国政府が考えるべきだ、私はそれは筋だと思いますし、やはり第一義的にやらなければいけないと思うんです。ただ、それに対しても日本の中で、それでもそうした動きに対して、もう少し共感する、そして、それに対して力を与えるような、そういう動きがもっとあってもいいと思うんです。

例えば、1990年代は慰安婦問題に関してアジア女性基金、これはいろんな批判があります。アジア女性基金についてはいろんな批判がありますが、あれはある種、草の根の中で出てきた、いろんな募金活動のようなものであったわけで、いろんな人が募金しているわけですね。

例えば、今の時点で果たして日本の中で、そういうことが可能なのかと、私は悲観的なんですね。そういう意味で言うと、もちろん下からそういうものを支えることが出てくることは望ましいんだけど、今の日本の現状を考えると、政府の言うことと違うような新しいアプローチで問題に取り組んでいこうとするような力がないとは言いませんけれども、どんどん弱くなって先細りしていついていくと。

これは、私は韓国も同様だと思います。日韓の両方において私は、常々一番悩むところなんだけれども、日韓の間で生じるようなさまざまな問題について、それに取り組むということは絶対必要だと思います。歴史問題に取り組むということは絶対必要なんだけれども、今の日韓関係を考えるとそういう問題が出てきて、そういう問題に取り組めば取り組むほど、要するにその問題を解決する日韓関係の底力が向上するんじゃないくて、どんどん先細っていついていくような、私はそういう危機感をものすごく感じますね。

もちろん、いや、そんなことはない、もっと下からもそういう力があるんだというお叱りを受けるかも知れませんが、私は現状としてはそうなのかなというふうに思っております。

もちろん、だからといって私は決して悲観はしていません。今の自分たちが置かれた状況、北朝鮮、米中という大国間に置かれた状況の中で、いかに自分たちの安全・平和・繁栄とか、そういうことを確保するのかということに対して、やはり一番身近で、一番共有項を持つのは、私は韓国だと思うんです。

そういう意味で言えば、やっぱり韓国の人たちと悩みを共有して知恵を出し合って、こうした困難にいかにか立ち向かうのかということ、今後も考えていきたいとは思っております。答えになったかどうか分かりませんが、以上です。

元兼：ありがとうございました。では、今からの時間はフロアの皆さまから質問や、ご意見を承りたいと思

いますが、いかがでしょうか。

【質問1】：70年代の南北対話についてです。あれは大国間の影響関係が動機なのか、それとも自分たち南北だけでやろうとしたのか。それが本気なのか、それともパフォーマンスなのか、そこだけ教えていただければと思います。

木宮：非常にアカデミックな質問であれですけれども。私の答えは、もちろん両面があるかと思いますが、その2つの優先順位をあえて言えば、やはり後者。

つまり大国間の国際関係の変動によって、もちろんそれに適応したからこそ対話をやったという側面があるんだけれども、ただ、やはりそういう大国間の国際政治が朝鮮半島の自国の体制を動揺させる、不安定にさせないために、お互いに何とか管理しようとしている。別々な思惑で管理しよう。

それが一つはお互いの体制の強化、韓国の維新体制であり、北朝鮮の憲法改正であり。そして、それと並行して行われているのが南北対話、これはある意味では南北のお互いの危機管理だったと思います。

ただ、どういうふうに関係管理をするのかというアプローチの仕方に関して73年6月23日に、まさに韓国と北朝鮮で全く方向性の違ったものが出るわけですね。韓国は平和統一外交に関する大統領特別宣言。つまり先ほど、私の言葉で言えばTwo Koreaでいきますよ、韓国は、と。ところが北朝鮮は祖国統一五大方針、そこでは北朝鮮は、Two Koreaというのは分断を固定化させることになるんだから、われわれはOne Koreaでいくんだと。

その韓国と北朝鮮のそれぞれの危機管理の方向性が全く違った方向性を向くということで、つまり対話はお互いにこれ以上続けても仕方がないということで持続しなかった、私はそのように解釈しています。

元兼：よろしいですか。他にいかがでしょうか。はい、お願いします。

【質問2】：今日は、非常に興味深いお話をありがとうございます。それで先生がおっしゃられたように、グローバルヒストリーの中で朝鮮半島問題を考えていくというのは私も重要だと思いますけれども、その際、冷戦が終焉したこととの関係、ヨーロッパの冷戦の終わり方と、アジアのこれは終わっているのか、終わっていないのかということも微妙なんです、かなり違いがあると思うんですね。現状を考える場合に、そういうアジア的条件というか、先生が過去の冷戦に戻る可能性もあると言われましたけれども、そうならないためのアジア的な条件みたいなのを考えるとする場合、一体何なのか。

例えば、私が気になるのはASEANとの関係ですね。一時、ASEAN + 3とか、そういうところで言ってみれば中国・韓国・日本というのは接点を持つ場にもなっているわけですが、ASEAN的な要因ということを見ると、かつての冷戦に戻らないような、そういう条件というものを考えることができないのだろうか。そういう可能性というのは先生の場合、どうお考えなのか、ちょっとそこを教えていただきたいと思います。

木宮：どうもありがとうございました。

今、ヨーロッパとアジアにおける冷戦の終わり方という話で、場合によっては例えばアジアでは70年代に、もう冷戦は終わっていたんだと、そういう見方も一方ではあり得る。さらにアジアにおける冷戦が米中の冷戦だとするのであれば、もちろん中ソ対立もあったりして70年代、米中の接近もして日中が国交正常化していたわけで、べつに中国と対立関係があったわけではなくなった。

そういう意味で言えば、ヨーロッパにおける冷戦の終焉が90年であるとする、アジアにおいては、むしろその前の段階で、もう既に冷戦が終わっていたんだというふうに見ることもできるかも知れません。

ただ、そんなに一概には言えないかも知れません。一つにはソ連邦という国家自体がヨーロッパとアジアをまたがっている国であるということもありますし、それからやはり例えば米中や日中は関係改善したけれども先ほど言ったように日朝、米朝は国交がないわけですし。

それから中韓、ソ韓にも国交がないわけですから、そういうことで言えばやはり90年代に冷戦終焉ということ求めなければいけないという見方は、もちろん成り立ち得ると思います。

アジアにおける冷戦は、これはベトナム戦争もそうですし、場合によっては朝鮮戦争もそうですけれども、いわゆる大国間の国際関係だけではなくて、それにある種オーバーラップするかたちで第三世界における、ある種の冷戦というか国内の体制を巡る正統性争いという問題が非常に立体的に絡み合いながらアジアにおける冷戦が展開していたと、そういう複雑性を持っている。

だから、大国間の関係が終焉したから、例えば中東欧の社会主義の諸国が一斉に、もう脱社会主義をしたということとはやっぱり違う。ベトナム・中国・北朝鮮だって、括弧付きの社会主義かも知れませんが、それが残ったと、そういう側面があるのかなと思います。

2番目としてASEANのことですけれども。確かに、私は現状、米中の対立構図がだんだんエスカレートしていく中でASEANが取ろうとしている立ち位置は、ある意味では非常に賢明な立ち位置というか、そういうことはしているかと思っています。

ASEAN自身が、例えばASEANはASEAN on the Indo-Pacific、ASEAN版のIndo-Pacific構想ということ掲げて一応「Indo-Pacific」という言葉を使っているわけです。しかしながら、それはべつにアメリカや日本が主張するようなIndo-Pacificと全く同一化するのではなくて、米中の狭間の中でいかにASEAN自身の自立性を確保していくのかということを中心にかなり強調しているわけなのです。そういう意味で見れば、ある意味では、賢い面があると思うんですね。

ただ、問題なのは、では日本なり韓国なりがASEANと同じような立ち位置に立ち得るのかどうか。やっぱりASEANから見た米中と日韓から見た米中というのは、また、これは違いがあるんですね。そうするとASEANの対応というのは非常に参考にはなるし、学ぶべきところは多いけれども、他方で、では、日本なり韓国なりが果たしてどうか。

例えば、文在寅（ムン・ジェイン）政権は一応ASEANを見習うべきだということで「新南方政策」というワーディングを使って、要するに、いわゆる日本が主導して、アメリカがそこに関わるかたちでやったインド太平洋構想というものに韓国、文在寅政権はそこからは何とか離れたいということで新南方政策ということを行ったわけですが、どうもその後の米中関係の推移を見ると、韓国も、いつまでもいわゆる戦略的曖昧性というものではいられないということで尹錫悦（ユン・ソクヨル）政権としても韓国版インド太平洋戦略というものを打ち出さざるを得なかったという側面があるんですね。

そういう意味で言えば、参考にはなるし学ぶべきところはあると思うけれども、ASEANに日韓も加わって協力してやろうというふうに果たしていけるかどうかというのは、ちょっと留保が必要かなというふうには思います。

元兼：よろしいですね。まだ質問はあるかと思いますが、時間の関係上、ここで閉じさせていただきます。

本日は最初にご紹介いただきましたように『国際政治のなかの韓国現代史』というテキストの内容を中心にということで。本で、私もちょっと拝見して印象的だったのが北朝鮮現代史の部分がかなり補説として描

かれていて今回、特に北朝鮮と韓国という、この歴史を分断された2国の、ある種SWOT分析のような取りまく環境の変化とか、そういうことを中心にお話くださいました。

ただ、ほぼ同じ出発とか地勢的な状況に近い中で、なぜ異なる帰結を見いだされたのか、その政策の異同について、よく新制度論とか比較政治学でイシューとか、利害のインタレストとともに、政策アイデアというのがあると思いますけれども。今日のお話の中では、やはり2つのKoreaという、ある種なかなか難しい、共感も非常に温度差はあるかと思いますが、そういう中でやはり政策の違いとかが生まれていったのかなというふうな印象を持ちました。

と同時に先生ご自身が、特に韓国と朝鮮というよりは、周辺部から国際関係で大国の米ソ中との関係を投射してみたいということから研究をされたということで、われわれ自身、先ほど出水副センター長のほうからもありましたが、今度は逆に周辺部、さらに周辺部である福岡、九州という、そこからあらためて日韓だけではない、この問題というのを考えてみることの必要性を痛感させられたと思います。

今日は、本当に限られた時間ですけれども貴重なご講演をありがとうございました。では拍手をもって、ここで終わりたいと思います。(拍手)

冷戦時代の肖像としての「密航の文学」



斎藤真理子*

斎藤：こんにちは、斎藤真理子と申します。私は韓国の小説の翻訳をやっています。翻訳はパワフルな読書ともいえますので、要するに本を読むことしかやっていないんです。なのに東大の先生の後にこんな所に来てお話をしているのかと思うと、非常に恥ずかしいんですが、よろしくお願いします。今日のお話は、私が一人でいろいろな本を読んだ、一人読書会の報告のようなものと捉えていただければいいかと思います。

今回、この大きなテーマの中で〈密航〉ということについて考えてみる機会を得ることができまして、大変感謝しております。

ただ、私、勘違いしてしまっていて、今回の発表時間を1時間半だと思って勘違いしていたのです。お手元の配付資料も1時間半分書いてしまいました。そのため途中の部分を少し圧縮しまして、早口で話します。紙芝居みたいなものだと思って気楽に聴いていただければと思いますが、内容は結構深刻かもしれません。

では、冷戦時代の肖像としての〈密航〉者の肖像ではないかと思えるものをまず、ご紹介したいと思います。韓国とも非常に縁の深い文学者で、茨木のり子さんという詩人の「七夕」という詩です。

状況を説明しますと、ここには、茨木夫妻が夕涼みに川沿いを散歩していた時の様子が描かれています。散歩していると、そこへ突然、闖入者が現れるんです。詩の途中からですが、読んでみますね。

「アンタラ！ ワシノ跡 ツケテキタノ？」

不意に草むらからぬっと出て赤銅いろの裸身が凄む

焼酎の匂いをぶんぶんさせながら

わたしはキッと身がまえる

キッと身構えてしまうのはとても悪い癖なのだ

「今日は七夕でしょう

だから星を眺めにきたんですよ」

夫の声がばかにのんびりと闇に流れ

「タナバタ？

たなばた……アアソウナノ

* 翻訳家、ライター。著書に『韓国文学の中心にあるもの』（イースト・プレス）、翻訳書に『ギリシャ語の時間』（ハン・ガン著、晶文社）、『82年生まれ、キム・ジヨン』（チョ・ナムジュ著、筑摩書房）、『ディディの傘』（ファン・ジョンウン著、亜紀書房）など多数。

ワシハマタ……ワシノ跡ツケテキタカ思ッテ……
トモ……失礼シマシタ」

詩人の実体験だと思うのですが、茨木さんは元々劇作家を目指していて木下順二に師事したという経歴もある方で、このように一幕のドラマみたいなものを書くのが本当にお上手です。ちなみに私は茨木さんの後々の詩より、このぐらいの時代のものが好きです。

この詩が書かれた年代ははっきり分らないのですが、1959年から1963年ぐらいまでと思われます。そして、この詩の中で茨木さん夫妻にすごんだ男の人は、「朝鮮語の華々しいけんかが展開される」、「何世帯住んでいるのか分らない」、そういう家の住人だと詩の中に書いてあります。ですからコリアンだということとははっきりしています。

朝鮮半島からは、古代から多くの人々が日本列島にやってきて、さまざまな文化を伝えてくれました。詩人はこの人がコリアンだと悟り、そうした人たちのことを考えながらこのように詩を続けます。

古い恩師の後裔たちは
あちらでもこちらでも 今はさりげなく敬遠されて
夕涼みの者をさえ 尾行かと恐れている
(中略)
わたしの心はわけのわからぬ哀しみでいっぱいだ
つめたい銀河を仰ぐとき
これからは きっと 纏りつくだろう
からだを通して発散した強い焼酎の匂いが
ふっと

このように「七夕」は終わります。

見事な詩です。そして私はあるときから、明確には書かれていませんが、この人は〈密航〉して来た人ではないかと、何となく思ってきました。それは、「夕涼みの者をさえ 尾行かと恐れている」の「尾行」という言葉のリアリティーから想像したことです。

この詩が書かれた頃、朝鮮半島から〈密航〉と呼ばれる行為によって日本に来る人は非常に多かった。1959年の『朝日新聞』の記事を見ますと、入管当局が、密入国してきて登録を済ませていない人の数は5万人から6万人であると推定しています。ところが、同じ記事の中で警察庁が、約20万じゃないかということ言っているんです。5～6万から20万という幅を見ますと、要は実態をつかめていないということじゃないのか。大変な数の人が海を越えてきているが、正確な数は把握のしようがないということなんでしょう。

要するに、それだけの人が監視、摘発の対象になっている。そして、〈密航〉者の摘発については住民からの通報によるものも多くあったと聞いていますから、この人が警官ではなく普通のカップルにハッとするのも当然だったでしょう。

このようにして、戦後、朝鮮半島から多くの人たちが国家を経由しない方法で日本にやって来ました。ある程度の年齢以上の日本人の多くが、そのことを世間知の一部として知っていたと思います。私もまた、在日コリアンの先輩たちなどから、「押入れの中の知らないおじさん」というような、いわば一種の定型化した語りをたびたび聞いてきました。ある日、自分の家の押入れに知らない人がかくまわれていたが、そのことは絶対に学校で言うてはいけないと言われた、そして成長と共に、あれは〈密航〉して来た人だったので

はないかと悟っていく。そういうお話です。

戦後の日本は、これらの人々とともにありました。〈密航〉者と呼ばれた人々の多くは戦争難民、政治難民でしたが、保護されず、旧植民地人に適用するために作られた法律によって排除され、排除のための施設「大村収容所」から強制送還されることが多かったのです。いわば冷戦秩序と民族差別が重なったところで苦しんできた人たちといえます。

同時に、〈密航〉という生存をかけた行為は、多くの人の知恵と欲求がからみあう人間ドラマであり、しかし「密」であったために、当事者がその経験を語ることは制限されてきました。

今回はこれらの〈密航〉を、主に日本語文学がどのように描いてきたかをお話したいと思いますが、最初に、自分が〈密航〉について考えていることを、まとめておきたいと思います。

実は、そもそも、私は〈密航〉という言葉あまり使いたくないんです。〈密航〉の「密」という字はやはり密貿易や密輸など、本当にマイナスの嫌なイメージがあります。彼らは本当にそんなイメージに近い人たちだったのか、市民社会に害を与えるような人たちだったのか。そうではないだろう、と思うからです。

かつて、ある当事者の人が1979年に『朝鮮研究』という雑誌の中のインタビューで、自分の〈密航〉について話しています。その人は日本で生まれて第二次大戦の時に疎開で朝鮮半島に一回戻っています。行ったこともない場所です。日本生まれだからそこは知らない土地なのですが、おじいちゃん、おばあちゃんがいるから親と一緒に戻ったということなんです。

そしてその後また日本に来たので、「それは密航いうてもちょっと違う、仕方がないものやと思います」と語っています。戦争を挟んだ家族の移動、それが法律のために、〈密航〉と呼ばれる行為と整理されてしまったわけですね。

実は、ある知人に、九州大学で〈密航〉の話をするとう話したところ、その人が、自分のおじいさんもいわゆる〈密航〉で日本に来たのだと教えてくれました。

そして、私が〈密航〉という言葉は使いたくないんだと言いますと、その人が、自分がそれについて考えているイメージはこんなものだという喩え話をしてくれたのです。

「コップに水が入っている。その水に棒を入れてかき回したら、否応なく水は動いて動きが生じる。そしてある瞬間に棒が止まったとしても、水は相変わらず動き続ける。流れは、その瞬間には止まらないし、かき乱された流れはある程度の時間の経過の中を漂い続ける。戻ったり、また帰ったりと。〈密航〉というのは、そういうものに近いという感覚を私は持っている」。

これは、本当に見事な比喩だと思います。

まさにその通りで、日本の敗戦の直後は、海上での非常に大規模な人の流れが同時多発的に起きた時期です。朝鮮からも、他の様々な所からも、日本人が大挙して引き揚げてきました。それと同時に、日本列島にいた朝鮮人が朝鮮半島に大挙して戻っていく。さらに広く見ますと台湾、沖縄など、いろいろな場所で大きく人の流れが動いている。大日本帝国というものの枠組みが一回壊れたときに、否応なく人々の移動が起きるわけです。

ですから、日本と朝鮮半島の間の〈密航〉という人の流れも、限定された一直線の往復といったものではない。大きな全体の中での人の移動、循環の一部のようなものとして捉えた方がいいのではないかと思います。

そして一口に〈密航〉と言っても、時代によって動機が大きく異なります。45年から46年ぐらいまでは、離散した家族がもう一度集まるといった理由が一番多かったと思います。

その次に、朝鮮半島の政情が非常に不安定になるにつれ、混乱を逃れて日本に避難してくる人が増えました。特に48年の済州（チェジュ）4・3事件に際して、避難してくる人が非常に増えた。去年、ヤン・ヨン

ヒ監督が『スープとイデオロギー』という大変素晴らしいドキュメンタリー映画を発表されましたが、ヤンさんのお母さんは、済州島から4・3事件の際に〈密航〉して来たけれど、〈密航〉したことは娘に伝えておらず、自分は日本生まれだと話している。実際に日本で生まれた方で、その後1度済州島に戻られましたが、戻っているときに事件が起きたため、〈密航〉してこられたんですね。その、済州島にいた期間のすごく怖かった、苦しかったことや、〈密航〉のことは娘さんには話していないのです。それは韓国政府からも日本政府からも危険視される行為だからです。〈密航〉についてはこの、「語られない」という点が非常に重要だと思います。

その後朝鮮戦争が始まって、また多くの人が逃げてきました。ここにもさまざまな事情があり、戦争難民として逃げてくる人もあれば、戦争中に行きがかり上北朝鮮の兵士として行動し、脱走してきたものの、このままでは身の危険があるとか、または徴兵忌避とか、本当に多様です。

その後も、人の流れは減りますが〈密航〉はずっと続いています。60年代には朴正熙（パク・チョンヒ）政権を逃れて政治亡命的にやってくる人もおり、その後、就労のため、働くため、出稼ぎという形で渡ってくる人も増えてきました。

ですから、これら全てを一言で〈密航〉とくくってしまうのは雑すぎるのです。法律面から見ればそうなりますが、本来はこのように多様な移動の理由がある。また、法律に関しても、後で述べますが、一般の人がイメージする「法律違反」とはそぐわない面がある。それらを全て〈密航〉という毒々しい言葉で呼ぶのは何だかすごくしゃくだし、嫌だなと思います。

また、どれほどの人たちが〈密航〉と呼ばれる形で日本にやって来たのかに触れておきたいと思いますが、数はもう、わからない、わかりようがないと言って良いと思います。明らかになっているのは検挙者数のみですが、捕まらなかった人たち、そして〈密航〉の途中で亡くなった人たちも相当数いらっしゃるわけですから。

ただ、検挙者数のピークが1946年ということは、はっきりしているようです。年間1万7,733人という数字が出ていますが、この数字を紹介した人もその数倍はいるであろうと述べています。そして、〈密航〉の多くが済州島からであったということは、よくいわれている通りです。

さらに大きな問題は、「〈密航〉はいつ〈密航〉になったか」という点です。1952年まで、朝鮮人は日本国籍を保持していました。〈密航〉というのは国を越えることなので、朝鮮人が日本に来るのは〈密航〉ではなかったんです。

しかし1946年3月に、GHQの覚書として「非日本人で一回でも本国に帰還した人は、連合国最高司令官によって認可された場合を除いて通商上の交通機関が利用できるまでは日本に戻ることを許可されない」という一文が出ました。「本国に帰還した非日本人」ですから、朝鮮人や台湾人を指します。これが決定的で、この、いきなりの決定によって、朝鮮人の渡日は一律に〈密航〉となりました。戦後、「解放人民」であったはずの朝鮮人が、どんどんその権利を狭められていく過程で、〈密航〉者が生まれたわけです。その後、47年には外国人登録令が公布・施行されて、朝鮮人は「外国人とみなす」とされ、外国人登録に違反した場合は、日本を強制的に退去させられることになりました。

この法律の形成過程は非常に複雑ですが、参考として、『入管問題とは何か』の第二章、朴沙羅（パク・サラ）先生による「いつ、誰によって入管はできたのか——体制の成立をめぐる」がとてもわかりやすく参考になりましたのでご紹介しておきます。

このような過程を経て〈密航〉の「密」の字が正当性を持てていきます。ですから、今の私たちが持つ「厳然たる法律があって、それに背くと分かっているながら〈密航〉する人々」というイメージには、初期の〈密航〉者はあてはまらないと思います。作家で評論家の黒川創さんが、46年のGHQ覚書で朝鮮人が〈密航〉

者にされて行ったことを指して「後出しジャンケン」だとおっしゃっていますが、本当にそうだと思います。

1950年には、皆さんご存じだと思いますが、大村収容所という非常に悪名高い施設が生まれました。ここは退去命令を受けた人が送還されるまで一時的にとどまるための施設だったはずですが、実際は刑務所のようなもので「現代のアウシュビッツ」などといわれました。

その頃の様子を伝える雑誌、例えば『アサヒグラフ』1948年6月30日号の「朝鮮海峡の密航者」という記事を見ますと、〈密航〉してきて捕まってしまった人たちがうなだれている写真などが出ています。これは対馬で捕まった人たちの様子ですが、ひところの対馬には本当に〈密航〉してくる人が多く、湯浅克衛という文学者が1951年に出した『對馬』という本は、〈密航〉の話ばかりで成り立っています。

また、『アサヒグラフ』1949年10月19日号の「密航者の送還基地」という記事を見ますと、長崎県針尾島の引揚援護局の様子が出ています。この施設が翌年、大村収容所になるわけです。そこにもたくさんの人たちの写真が出ており、また、この施設の撮影は今まで日本のメディアには許されておらず、今回が初めて取材が許可されたということも書いてあります。

そして、もう一つ、今回〈密航〉に関していろいろと調べていて、〈密航〉というのは先ほどの写真に出たような船に乗っている時だけではなく、その前と後が非常に大変なのだということをしみじみ思いました。もちろん、〈密航〉については、すべて本当のことが記述されているわけではさらさらありませんが、それでも、さまざまな人の体験を読んでいますと、本当にいろいろな条件や知恵が重ならないとできないことだなと思います。まず、お金がないとできません。さらに人脈、いい船長やいいブローカーに出会うことも大切でしょう。また、運もものすごく作用します。

どこから釜山まで行って日本に〈密航〉するチャンスを探るが、いい船主を見つけるまでに数カ月から半年ほどかかったという人たちもいます。現在の北朝鮮離脱住民（いわゆる脱北者）の場合も、一度中国に出て、そこからぐるりと回って韓国に入るルートを探るのに大変な年月がかかる場合がありますね。〈密航〉というのはそういう旅で、先が見えないという部分があるのですね。

しかも、〈密航〉が成功し、捕まらず強制送還されなかったとしても、日本に定着する過程もまた非常に大変です。特別在留許可を得たり、また偽の登録証を手に入れたりして日本社会に定着しなければなりません。そこもまた、あらゆるリテラシーを動員して人とつながり、またある場合には人にいろいろなことを隠し通して定着していくという、すさまじいサバイバルだと思います。ですから、〈密航〉というのは「ビフォー〈密航〉」と「アフター〈密航〉」というのをセットにしないと、本当には分からないだろうなと思います。

このように〈密航〉の複雑な面を見ていくと、なおさら、この言葉を使いたくないという気持ちになり、何か違う言葉がないかと思ったのですが、よく考えたらこれは言葉を言い換えるのではなく、〈密航〉と一言で片づけていたさまざまな行為を、もう一回ばらして、概念を変え、見方を変えて考察すべきではないかという気がしています。

そうすると、私の手にはおえない大きなテーマになってしまい、困ったなと思いましたが、今日は試みとして、それを文学者がどのように書いてきたか、主に日本語文学を中心にして、点描してみます。

文学は、歴史学や社会学のように、実証性のある成果をもたらすことはできません。しかし、文学にはその時代、時代の人たちが何を見て、何を考えたかを貯蔵する保管庫の役割がありますし、それによって世の中を俯瞰することもできます。それをまた後世の人が味わうことによって文学の命を延ばすこともできるわけで、そのような思考のきっかけになればいいなと思っています。

一つ申し上げておきますと、〈密航〉者が登場する作品、特に日本語文学といたしますと、やはり金石範（キム・ソクボム）先生の『火山島』をはじめ、梁石日（ヤン・ソギル）さん、柳美里（ユウ・ミリ）さんの長編小説がまず思い浮かびます。これら大作における〈密航〉者像は、それぞれにしっかり考察して一時間ず

つ発表しなくてはならないような性格のもので、今回の「点描」では取り上げられませんでした。機会がありましたら試みてみたいと思っています。今回は、〈密航〉者一人一人の人生や〈密航〉後の歩み、また人物の内面に焦点を当てたものに着目したいと思いました。何より大事なものは、〈密航〉者それぞれに異なるドラマがあり、また、その子供たちが日本社会の一員としてずっと生きてきたということだと思います。

今回、このテーマを扱った作品のすべてに目を通せたわけではもちろんありません。しかし、限られた読書の範囲でも、作品数自体は多くはないと思いました。在日コリアンにとって〈密航〉のことは欠かせない話題ですが、やはりタブーでもある。当然ですよね、法で裁かれることですから。

尹健次（ユン・ゴンチャ）先生が『「在日」の精神史1——渡日・解放・分断の記憶』の「朝鮮戦争と在日朝鮮人」という章で〈密航〉に触れて書いておられますが、その冒頭に「「密航」のことを抜きにして、「在日」を語ることはほぼふかのうであろう。しかし実際問題として「密航」について語ること、そしてとくに書くことはタブーでありつづけてきた」、そして「在日朝鮮人が「密航」にまつわる自らの体験を書き記すことは苦痛そのものであるし、ヘタをするとあの排外主義そのもののヘイトスピーチの餌食にもなりかねない」と書いておられる通りだと思います。

その中で、昨年出版された、尹紫遠（ユン・ジャウオン）という作家の『在日朝鮮人作家 尹紫遠未刊行作品選集』と『越境の在日朝鮮人作家尹紫遠の日記が伝えること——国境なき日々の記録から難民の時代の生をたどって』という2冊の本は、本当に貴重な本です。実は今日、私がここに来たのは、この2冊の話ができればそれでいいと思ったという面もあります。

尹紫遠は1911年生まれ、13歳のときに日本へ来て、1964年に亡くなりました。もう亡くなって60年近い作家の本を、京都の琥珀書房さんという小さな出版社が頑張って出されました。一般書で、Amazonにもありますけれども、「琥珀書房」で検索するとネット通販で直接買えますので、ぜひ読んでいただきたいと思います。

まず『在日朝鮮人作家 尹紫遠未刊行作品選集』ですが、ここに「密航者の群」という小説が収録されています。これと日記を合わせて読むことで、大変な知見が得られます。

日記の方は、1946年から64年にかけて書かれたものです。息子さんの尹泰玄（ユン・テヒョン）さんが、お母さんの大津登志子さんから受け継ぎ、大切に保管してこられたものですが、これが2019年に、縁あって宋恵媛（ソン・ヘウオン）先生のもとに届き、刊行に至ったわけでした。作品集にも日記にも宋先生が詳細な素晴らしい解説をつけておられます。日記の解説では、〈密航〉を語る時に何を隠して何を語るかという、その過程を綿密に調べて謎解きをしておられ、そこから、〈密航〉とはどういう行為であることかがまざまざとわかります。

というのは、この尹紫遠自身が大変な〈密航〉体験をしているのですが、そのことが日記には一行も出てこないのですね。出てこないということに〈密航〉の本質があると。

実は、この尹紫遠という人は、日本の在日コリアンの文学史の中によく名前が出てきますが、全貌のわかりにくい方でした。13歳で日本にきています。大学で学ぶといった経験はなく、独学で文学を志し、もともと短歌を詠む人で、戦前に歌集が出ています。

有名なのは、今も岩波文庫の超ロングセラーとなっている金素雲（キム・ソウン）の『朝鮮詩集』、あれに尹紫遠が序文を書いているのです。また、手に入りにくい本ですが、朝鮮戦争が始まった1950年に『38度線』という小説を発表しています。どちらも大事な文章ですが、私は、今ひとつ全体像の捉えどころがないような気がしていたのです。ですが今回出版された日記を見て、この人の戦後の歩みを知って納得する部分が多々ありました。多感な文学青年という趣の方だったと思いますが、その人が解放後、〈密航〉体験を経て、

小説を書きたい、書いて伝えたいと思うようになる過程がこれらの本を読むとわかります。

尹紫遠も1946年に〈密航〉を経験しています。その理由は、生活苦と恐怖政治への嫌悪ということになるのだと思います。日本で結婚していた尹紫遠は、1944年に徴用を逃れて一度、妻とともに朝鮮に戻ります。1945年には、次兄の家族が住む北朝鮮の兼二浦で解放を迎えますが、すぐにソ連支配下での生活に苦痛を感じ、38度線を越え、釜山まで妻を連れて移動します（その体験を書いたのが後に刊行される『38度線』という小説です）。

そこから故郷の蔚山へ移動して〈密航〉船に乗るのですが、失敗して、日本上陸直前に捕まってしまうんです。ところがさらに、捕まった後、奥さんだけを残して自分は1人逃亡に成功し、東京へ逃げるという経緯をたどっています。奥さんとはそのまま離れ離れになりました。

47年から金達寿（キム・ダルス）らとともに在日本朝鮮文学者を結成し、短期間責任者を務めたこともありました。その後日本人女性の太津さんと再婚し、二人の子供もできましたが、一生食べるのに困り、クリーニング屋さんをやりながら、1964年に病気で亡くなるまで、一生懸命作品を書いたのです。

先に言った、〈密航〉が失敗して奥さんを置いて逃げたという経験がつぶさに書かれたのが、「密航者の群」という中編小説です。46年にGHQが朝鮮から日本に渡ってくる人を強力に規制しようとしたのは、46年5月に南でコレラがまん延したからでした。コレラを持って〈密航〉してくる人たちを、とにかく抑え込まなければならないということで、非常に急に規制が厳しくなる。尹紫遠は、そこにまさに引っ掛かってしまったのです。

小説では、作家本人を思わせる男性を中心として物語が進みますが、彼は山口県の海岸に着く直前に、住民に通報されて進駐軍に捕まってしまう。そこから下関に移送されて警察署に移動したところ、その船からコレラ患者が出てしまったのです。そこで問題が大きくなり、移送され、尹紫遠が乗っていた船以外にも集められた〈密航〉者を合わせて、全部で1,000人に近い大集団となりました。その大集団に、コレラ患者がいる可能性が高いわけです。実際に目の前でコレラ患者が倒れるのを見たり、介抱したりというすさまじい場面が描かれています。

そして、このコレラ患者を含むであろう1,000人の集団を、5隻の米軍の大きな船に分乗させて、海上で隔離するのです。あのプリンセスダイヤモンド号のようですが、もっとすごいのです。本当に怖かったと思います、そこにいたら。それを尹紫遠がたまたま体験して小説に書いたのですから、何という偶然でしょうね。

一人も患者が出なくなってから2週間経たないと船は移動できません。移動といったって、その船に乗っている人たちは〈密航〉失敗者ですから韓国に送還されるのですが、嫌でたまらない送還を前にして、コレラ患者がいなくなるのを海上で待っているという状況です。

ところで、リアリズム小説をばかにする時に「くそリアリズム」と言いますが、この小説は本当に「くそリアリズム」な部分があります。なぜかという、その船に分乗している間にトイレが機能しなくなったようなのです。船の周りに排せつ物がぶかぷか浮かび、それなのに、夏で暑いからとみんながその水で水浴びをしてしまうのです。そこから感染するかもしれないわけですから、とんでもないことですね。尹紫遠は、この集団の中ではインテリですから、「何をしているんだ」とみんなをたしなめたりとリーダー格のようになって活躍し、一種の高揚を感じたりする場面も書かれています。

けれども、この「密航者の群」という小説において特徴的なのは、〈密航〉してきた自分を非常に恥じている、弱く惨めな〈密航〉者の群を書いていることだと思います。

彼らが捕まって移送されていくとき、地元の「警防団員」の一人から「てめえたち、独立したとえはって帰ったくせにしやがって（ママ）、なんで密航して来たんだ。なまいき言いやがると、承知しねえぞ」といった日本語の罵声を浴びせられる描写があります。同時にまた、もともと日本に住んでいた朝鮮人が引き揚げ

で朝鮮に帰っていくのとすれ違い、そこで、仲間であるはずの彼らから「この国賊」といった言葉が投げつけられたりしている。双方向から居たたまれない言葉を浴びせられるのが〈密航〉者です。

そんな中で本当に悩みぬく朝鮮インテリの出口なしの気持ちが、綿々と書かれています。その中で、『密航者の群』というタイトルの中には自分も含まれているわけですが、自分も含む〈密航〉者とは、「自分の国に住んでいられなくなってよその国に〈密航〉した人たちだ」と表現しているのです。「自分の国にいられなくなった」という一言は、やっぱり重いと思います。国がなかった人々が国を取り戻した、なのに、そこにいられなくなってよその国にやって来るといことですから。

後で少し話しますが、格好いい〈密航〉者の文学というのもその後、出てくるのです。しかし、当事者である、体験者本人である尹紫遠はとてもそんなふうには書けなかった。そのことの重大な意味が今になって改めて光を放つ、貴重な作品ではないかと思います。

尹紫遠は、46年にこの体験をしてから、これを作品に書きたいという気持ちを長いこと持っていたようです。それを本人は「玄界灘に消えていった多くの同胞の霊に捧ぐ」という言葉で表しています。作品そのものには出てこないけれど、〈密航〉に失敗して亡くなった人もたくさんいたわけでしょう。そうした人々へ気持ちをもとに、非常に強く「書きたい」と思ったが、作品を書きたいから日記には〈密航〉のことを書かない、書けない。この、クロスする関係が重要かと思います。

日記には〈密航〉の記述が抜けているとともに、1948年と1950年の日記が欠落しているそうです。48年は南北に両政府ができたことで分断が固定化され、日本での政治活動も非常に活発になった重要な年です。そして50年は当然ながら朝鮮戦争が始まった年。この2年は日記が書かれなかった、あるいは破棄されたということですから、尹紫遠の執筆生活においては、書かれたことと書かれなかったことの双方が雄弁である。その双方が結実したところに『密航者の群』という作品があるといえます。悩んで、悩んで、本当に答えがない状況で、奥さんも置き去りにして逃げてきた、自分としては隠したいような過去だと思いますけれども、それを懸命に小説にこめた。ぜひ現物を読んで確かめていただきたいと思います。

さて、「密航者の群」は61年から62年に2冊のコリアン系の日本語の雑誌に連載されましたが、ほとんど話題にはなっていなかったと思います。単行本にもなりません。しかし、そのすぐ後の1963年に、〈密航〉という言葉がタイトルに入った小説が3冊、日本で、同じ年に出ています。金達寿の『密航者』、中蘭英助のスパイ小説『密航定期便』、そしてこれはおまけのようなものなのですが石原慎太郎の『密航』です。国会図書館で〈密航〉で検索すると、この3人の作品が並んで、何ともいえない不思議な眺めです。

そして、金達寿の『密航者』には勇ましい〈密航〉者像が描かれています。これは、一言で言うと〈密航〉から「帰国」へ、という道のりの物語です。つまり1959年に始まった北朝鮮への「帰国運動」に関連があります。

かいつまむと、韓国でパルチザン闘争をやっていた若い人たちが、2年間ぐらい山にこもって身をひそめた後、一緒に日本へ〈密航〉するのですが、二人のうち一人は成功、もう一人は失敗してしまいます。成功した人はやがて帰国運動に参加して北朝鮮に行きます。失敗した人は大村収容所内で送還先の自由を求める運動のリーダーとなり、その流れで、もう一度韓国へ戻って民主化闘争を担う決意を固めると、そういう覚悟が描かれます。つまり、もともと非常に政治的な人間だった2人の〈密航〉者が、さらに強くなり、南北それぞれに行って闘うのだというお話です。この小説は演劇にもなったらしいです。

ですから先ほどの尹紫遠とは全く対照的な、非常に意志的で政治的な〈密航〉者が描かれ、それが一定程度評価された作品だといえます。

次に中蘭英助という作家の作品です。彼は日本のスパイ小説の祖といえる作家ですが、この人が全く同じ63年に出した『密航定期便』という小説、これがなかなか面白いのです。これは、朴正熙政権の初期の頃の

お話で、この政権を覆す革命の意志を持った革命家が〈密航〉してきて、日本を根城に「〈密航〉定期便」という特別エンジン付きのボートをチャーターします。3日に1回航行して、対馬を経由して武器や同志を運んでくるのです。

そこに、諜報機関の人間や、ニヒルな探偵、革命家を助ける済州島の海女出身の美しい女性など、韓国ドラマにしたら面白そうな人物が大勢出てきて、非常に楽しく読むことができます。金達寿の小説と同時期にこういうものが出ていたというのは非常に興味深いことです。

さらに、おまけと言いましたが、石原慎太郎の『密航』です。ここで一つ私が思ったことは、〈密航〉と言ったときに、日本からどこかに〈密航〉するイメージだと、例えば吉田松陰などが思い浮かぶんですね。大きな船に潜入して欧米へ行く、冒険のイメージです。ですが、反対に日本に〈密航〉してくるといきなり、中国の怖い人たちとか、または先ほどのような朝鮮の打ちひしがれた人たちなど、非常に暗いイメージになります。〈密航〉する側とされる側では、景色が全く違ってしまふんだなと思いました。そして石原慎太郎の『密航』は、日本から「する側」の〈密航〉の話です。

2人の英語のうまい男の子が、ハワイ経由でアメリカに逃げようとするが、1人は成功し、1人は失敗するという模様を描いています。どうも、〈密航〉物語は2人で行って命運が分かれる物語が多い気がしますね。

まあ、そんなに面白いものでもないのですが、時代の気分というのはなかなか侮れないものがありますので、60年安保の後の63年に〈密航〉というタイトルの小説が並んでいるのを見ると、当時〈密航〉という言葉にはどんなイメージがあったのかなあと知りたく思いました。

ここで、『密航者』と『密航定期便』に関して共通に言えるのは、ここに出てくる〈密航〉者は徹底的に政治的人間だということです。ですから、その人間の内面というよりは立場を描いています。とはいえ『密航定期便』は今読んでも非常に楽しめると思いますが、金達寿の『密航者』は、今読むとたいへん複雑な気持ちになることの多い小説です。これは作家自身も後に振り返ってそうだったのではないのでしょうか。帰国運動の真っ盛りで、北主導の統一に対して非常に楽観的な姿勢がよく現れていると思います。

これと同じころ、62年の『アサヒグラフ』62年1月19日号にも、神戸港で捕まってしまった〈密航〉の姿が報道されています。このころも、人数は減りましたが年間1,000人ぐらいの〈密航〉者がいたそうです。このように昔の雑誌には、〈密航〉に失敗した人たちの写真が割とよく出てきます。

これらの写真には、大韓民国へのマイナスイメージを抱かせる効果があったらうなあとと思います。そういう視点を持っていなかったのですが、今回、写真を立て続けに見てそう思いました。一方で50年代以来、建設の進む北朝鮮といったビジュアルも多く流れていたもので、それを同時に見ると、日本の市民、特に進歩的な人が、北は進んでいるが南は傀儡政権で駄目なんだ、人々が苦しんでいるんだという印象を持つ上で影響を与えたかもしれません。

『週刊朝日』1964年9月4日号にも「密航船は玄界の波を越えて——なぜ彼らは韓国を脱出してくるのか」というずいぶん大型の記事が掲載されています。この記事の結論は、〈密航〉の理由はさまざまだけれども、やはり国が2つに割かれたために繁栄に結びつかず人々が食えなくなって来るのではないか、といった同情的な論調でした。

これらを眺めていますと、日本のマスコミには、惨めな大韓民国から逃げてきた哀れな〈密航〉者像がある。一方、文学の世界には非常に政治的で確信を持った〈密航〉者像がある。その間にあって、〈密航〉を体験した当事者である尹紫遠の〈密航〉者の物語は、受け入れられにくかったらうなという気がします。

例えば、金達寿の『密航者』は、研究者であり法政大学教授だった尹学準（ユン・ハクチュン）氏の体験をもとにしていることがよく知られていますが、尹先生自身がそれを公にしたのは1970年代後半になってからのことです。詩人の金時鐘（キム・シジョン）先生も、〈密航〉されてきた方ですが、やはりそのことを

語られたのはずっと後のことでした。〈密航〉だけではなく、済州4・3に関わられた経験から一つながりのものとして、当時のことは語れなかったという歴史があり、それ自体が「冷戦時代の肖像」ですよね。そんな中で、尹紫遠の体験は、「密航者の群」が発表された61年、62年には、どこにも着地のしようがなかったのかもしれない。逆に今こそ、存在自体が「不法」とされる人間の移動の物語として、読む価値があるのではないかと思います。

そのような60年代前半を経まして徐々に、少し違う〈密航〉者が現れてきます。例えば、ベトナム戦争への参加を拒否して1965年に日本に〈密航〉してきた韓国の軍人金東希（キム・ドンフィ）。また、在韓被爆者の問題を訴えるために1970年に日本に〈密航〉してきた孫振斗（ソン・ジンドゥ）。これら、植民地主義と冷戦構造の中で追い詰められた人たちが、〈密航〉という手段で訴えにやって来る。それをもって初めて〈密航〉者が可視化され、日本の市民にもその姿が見えるという時期がありました。

同時に、1968年の金嬉老（キム・ヒロ）事件など民族差別の問題を契機に、大村収容所の問題にもう一度焦点が当たりました。そのような経緯があって、70年代にいろいろ本が出ています。

先に紹介した『密航定期便』を書いた中藺英助が、『在日朝鮮人』というストレートなタイトルの本を書いています。これが正面から大村収容所のことを扱っています。つまり在日朝鮮人問題の原点に大村収容所の存在があるということですね。実はこの作家は、『密航定期便』を書く際に大村収容所へ取材に行ったのですが、取材でいろいろな人に出会い、彼らのことが忘れられず、そのテーマを温めて書いたのが『在日朝鮮人』です。在日朝鮮人の暮らしと〈密航〉の密接な関係をしっかりと説明していますが、その中に「自警団の思想」という言葉が出てくるんです。

自警団とは言うまでもなく、関東大震災のときに率先して虐殺に加わった、誰に命令されたわけでもないのに加わっていった人たちのことですが、大村収容所を成り立たせているのは、日本人の中にその「自警団の思想」があるからではないか、といった内容です。これは現在でも非常に重要な指摘だと思います。

また、吉留路樹の『小説「密航者」群』、藤崎康夫のルポ『密航者』、また鶴見俊輔と飯沼二郎が「大村収容所を廃止するために」という副題を持つ雑誌『朝鮮人』を刊行するなどの動きが注目されます。

こうした時代を経て、ごく大きな流れで言えば、韓国の経済的な地位が上がっていき、一方ではベトナム難民が本格的に日本へ来て、日本も難民条約を何とかしなければならなくなるという大きな動きの中で、朝鮮半島からの〈密航〉者の問題がなし崩しに解決されたといえますか、根本的な問題の焦点化はされないままに時間が経過し、その過程で多くの人が特別在留許可を得て定着していくという経緯を辿ったのではないかと思います。このあたりは錯綜していて、浅学な私が一言で言うことはできませんが。

次に少し飛びまして、次世代——などとは雑駁にくくれないのですが——の作家たち、特に女性作家が書いた〈密航〉者の物語を2冊ご紹介したいのですが、まず深沢潮さんの『海を抱いて月に眠る』です。

これは自分のお父さんの体験を一部、モデルになさっているということを、話しておられます。もちろんフィクションなのでそのままではありません。

小説では、16歳で〈密航〉してきた男性が、その事実を家族に知らせないまま亡くなります。この人は日本に定着するために偽の登録証を買い、その名前で生きてきたので、年齢も名前も実際とは違っていたんですね。でも家族は、父が亡くなって初めてそれを知るのです。ですから、この小説の芯にあるのは主人公の沈黙であり、「語らなかった」ということが物語の大きなテーマです。

そして小説は、娘が父の歩みの謎解きをしながら自分の生き方を見つけていくという展開になっています。お父さんには一緒に〈密航〉してきたもう1人の仲間がいて、その人は日本の中で反独裁政権運動というのをずっと続けた人でした。お父さんは、政治家家庭かという二択の中で後者を選びますが、仲間との関係も断ち切らずに生きてきました。〈密航〉を体験した人の一括りにできない複雑な内面を丁寧に描いて、それ

が今を生きる娘の世代にも引き継がれていくところが描かれます。

それから金蒼生（キム・チャンセン）さんの『風の声』という作品。この方は今、済州島に移住なさって、そこで書きつづけておられます。『風の声』は、あの4・3の時に、お母さんに船に乘せられて〈密航〉してきた双子の女の子が、それぞれでどういうふうに生きてきたかという、これもまた2人の物語です。

やはり〈密航〉の物語というのは、1人のケースで語りきれないのだと思います。だから2人の運命がどう違ったかという物語が多くのではないのでしょうか。〈密航〉者は、いろいろな面で生活に規制が掛けられるので、我慢しなければならないことの多い人生になってしまうし、さらに女性だからこそその不利益もあります。そうした具体的なことが細やかに書かれています。最終的に、2人はそれぞれに周囲の人々と助け合いながら自分の道を見つけて生きていく。1人は作家自身と同じように済州島に定着して、おそらく4・3のときに亡くなった両親の消息を探しますが、それはわからないけれども地域の人と助け合って生きている。もう1人は大阪で暮らしています。

二作とも、キーワードは「回帰と再生」と言って良いと思われ、『海を抱いて月に眠る』の主人公は名前を韓国名に変え、『風の声』では主人公の一人が済州島に移住しますが、大阪で生き抜くもう一人の人生も提示され、人生の意味づけを民族的な回帰のみに固定せずに開いていく物語とも感じました。つまり〈密航〉という、親が選んだ選択のその先に、自分でどういう物語を作っていくのか、そういう小説だと思います。

最後、駆け足になりますが、パク・ソルメという韓国の作家の「広場」という短編。韓国に崔仁勲（チェ・イヌン）という非常に有名な作家の『広場』という小説がありますが、それに寄せて書かれたもので、『広場』の主人公・李明俊（イ・ミョンジュン）も〈密航〉者であり、また金時鐘も、連続射殺事件の犯人である永山則夫も〈密航〉者であるというユニークな視点で描かれています。〈密航〉にまつわる政治性をいったんはぎとって、人間と人間と海の関係に還元して考えようとする試みということができ、非常におもしろいのですが、本当に説明が長くなるので、パク・ソルメを知っていて詳しく聞きたいという方には、後でお話をします。

また、先に出た「自警団の思想」に関連していくつか短歌を紹介します。

密航者の涙は心を責むるとも係刑事よ弱気となるな
日帝悪政の過去ゆえ密航すと叫ぶ奴を泳がせざま手錠打つ
殴らない日本の警官とにやにやする密航者になめられ取調始む

1962年に刊行された竹内一作という歌人の歌集の一部です。お巡りさんが〈密航〉者を検挙する時の気持ちを短歌にしたものですね。

海を越えてくる人たちは迷惑で危険な嘘つきだというステロタイプとともに、彼らへの恐怖心が現れていると思います。今読むと本当につらく感じてしまうのですが、実はこの人は広島市の被爆者でもあって、原爆を詠んだ歌もあるのです。これらの歌を発表したずっと後、韓国人被爆者が日本へ来て、被爆者手帳の交付を求めて闘うわけですが、そうしたことをこの短歌には、自らを厳しく律しなければこれらの人々に対応できないという、いわば「自警団の緊張」のようなものが漂っていると思うのですが、ウィシュマ・サンダマリさんの事件で見えてきた入管で働く人たちの姿勢にも通じるものがあるような気がします。

最後に、詩人の李美子（イ・ミジャ）さんの詩を紹介します。「しゅうさん」という詩の部分です。

十歳のとき海峡をこえた

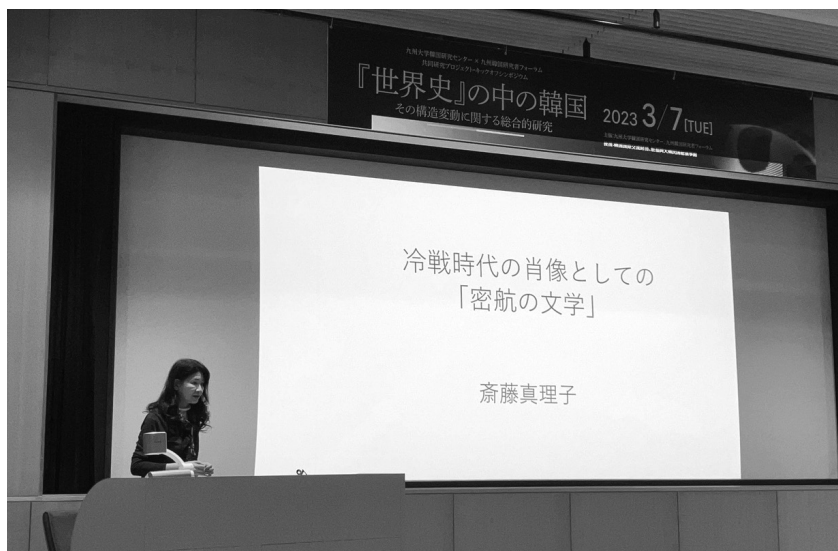
解放された祖国はまた戦争で
そのまま日本から一步も出ることなく
しゅうさんの一回きりの人生に
二回の戦争があった

周さんだろうか それとも
秋さん あるいは朱さんなのか
父をのぞいてほんとうの名を知らなかった
その父もとうに死んで しゅうさんは
ただのしゅうさん

「しゅうさんの一回きりの人生に二回の戦争があった」という簡潔な二行で、すべてが語られていると思います。これも〈密航〉の「み」の字も書いていないけれども、詩の向こうに〈密航〉者の肖像が見えるようです。

〈密航〉という毒々しい言葉のくくりの中にも、本当にいろいろな人生があったわけで、そういう人たちはやはり紛れもなく、冷戦構造の中で、小さな一人一人の肌で感じるイデオロギー対立の怖さに翻弄されながら、〈密航〉してきたことに気づかれぬまま生きてきた人たちだと思います。学校で、街で、この人たちと肩を並べながら、それを知らないままに一緒に歩んできた日本なのだとすることを、改めて考えたいと思います。

また、文学作品を読むときに、ここには何が「書かれていないか」ということは、私たちには絶対に分かりません。ですが、書かれていないものがあるのだということを頭に置いて、さまざまなテキストに接したいなと思いました。本当に駆け足になりましたが、ご清聴ありがとうございました。



辻野裕紀（韓国研究センター副センター長）：ご講演たいへん興味深く拝聴いたしました。まずは、本シンポジウムにご登壇くださり、心より御礼申し上げます。茨木のり子さんの「七夕」の引用から始まって、朝鮮半島からの「密航」についての歴史的背景や法制的問題、さらには尹紫遠の「密航者の群」をはじめとする「密航の文学」の個別具体的紹介と文学史的考察まで、非常に多岐にわたる、博引旁証の射程の広

いお話を展開してくださいました。文学と近現代史の交差路を見事に示してくださった、記念すべき講演会になったと思います。

近年、韓国語圏の文学が陸続と日本語に翻訳されていて、翻訳者の方も増えてきていますが、斎藤先生は其中でも別格の存在だと私は認識しております。先生はもともと詩人でもあって、1990年に思潮社から『ひびき はばたき ふぶき』という詩集を出しておられます。さらに1993年には『입국 (入国)』という韓国語の詩集を上梓されていて、いわば〈越境作家〉としての一面もお持ちです。今私の手許にあるのは、2018年に出版された『단 하나의 눈송이 (たったひとつの雪片)』という『입국』の改訂版ですが、「序詩」の次の詩のタイトルがやはり「入国」で、その中に「密航」という単語が含まれていること、そして、この詩集への評価として、「韓国文学が外国人に初めて発給した「ビザ」である」という一節があって、これは今日先生が論じられた「密航の文学」の内容と直接的な関係はないのですが、最初に「密航の文学」というテーマについて扱われると伺ったときに、即座にこの詩集のことを思い出しました。翻訳家としての業績が至大なので、斎藤先生の詩人としての顔についてはご存じない方も多いかと思いますが、文学的キャリアが詩を紡ぐところから出立しているという点は、「斎藤真理子」という稀有なる翻訳家を考えるうえでも重要だと存じますので、紹介も兼ねて申し上げました。

今回のシンポジウムは、「『世界史』の中の韓国」というのがテーマでして、そこに文学作品の翻訳家である斎藤先生をお招きしたのは、文学と歴史というのが実は密接な関係にあるからです。とりわけ20世紀後半に入って、「客観的な歴史などは存在しない」という言説が力を持つようになり、歴史の持つ〈物語性〉が重要視されるようになってきました。象徴的なのは、イヴァン・ジャブロンカの『歴史は現代文学である』という著作のタイトルだと思いますが、「文学によって歴史を再構築する」という営みは、韓国文学であれば、例えばキム・ヨンスの作品群などがその実例で、そういったコンテクストも念頭に置きつつ、今日の「密航の文学」というお話を拝聴しました。また、先生はご著書『韓国文学の中心にあるもの』（イースト・プレス）の中で、いわゆる「分断文学」について、多くの紙幅を割いて力説しておられますが、こうした韓国語圏の現代文学の根幹をなす朝鮮戦争や南北分断、すなわち冷戦の問題が、在日朝鮮人文学にも同様に伏流しているということを改めて確認させられました。

「密航」というのは、上位概念で言えば「移動」であり、人が移動するということは、人だけでなくそこには必ずモノやコトの移動も随伴します。例えば、日本と半島を行き来するヤミ商人が韓国の書物を日本に持ちこんで、それを朝連（在日本朝鮮人連盟）が買い取ったり、逆に在日作家の作品が半島に入っていったり、といったこともあったわけです。そう考えると、密航を描いた「密航の文学」がある一方、「密航する文学」というのもあって、もしかすると両者は地続きなのかもしれないというような想像もしてみました。

私たちは、「密航」というと、一見「過去」の出来事のような印象をつい持ってしまいがちですが、つとにクロウチェが「すべての歴史は現代史」であると喝破し、それに対して、エドワード・ハレット・カーが「歴史とは現在の問題に照らして過去を見るところに成り立つもの」であると敷衍したように、「密航」にまわりつく問題群は、先生も触れておられましたが、「ウィシュマさん死亡事件」に象徴される日本の入管の体質、難民認定率の低さに顕現する日本の閉鎖性、「自警団の思想」、「朝鮮籍」をめぐる誤解などにも連なっていく論点で、今日のお話は決して「過去」ではなく、「現在進行形」のアクチュアルな問題です。

今日の予習として「尹紫遠の日記」も事前に読んでみたのですが、密航については、身の危険や「密航」という単語につきまとうネガティビティもあって、当事者自身は長い間〈語り得ない〉領域であったわけですね。それゆえ、「尹紫遠の日記」では「密航」について言及されていません。しかしながら、文学という形態をとって、フィクション性をまぶすことで初めて語りうる対象となる。これは文学のみがなせる業だと思います。しかも、当事者が書くということは、文学理論の術語で言えば、リアルな「内的焦点化」が可

能になるという点で、文学の機能のひとつである〈記録性〉が前景化するというところにほかなりません。この意味で、最近尹紫遠が注目されはじめているのは意義深いことだと思います。

さらに、詳しくは述べませんが、当事者による〈表象の困難性〉という問題や、「書かれていないことへの想像力の要請」という論件は、例えば、プリーモ・レーヴィなどのいわゆる「ジェノサイド文学」の〈証言不可能性〉とも通ずるところがあるような気がいたしました。

日本人の持つ「密航」の「する側」と「される側」のイメージの非対称性というご指摘も重要だと感じました。「される側」としては「迷惑」であるという印象を日本人は持っていたというお話がありましたが、一方で、解放前から日本に定住していた「朝鮮人」たちが密航をどう捉えていたかという視点も大事かと思っています。例えば、のちに共和国（北朝鮮）の要路にもついた、詩人の許南麒は、密航者を歓待したわけではなく、むしろ白眼視していたということが、「密航詩抄：君のカバンは大きすぎた」（1951）という詩からはっきりと窺えます。これは朝鮮戦争のときに書かれた詩で、日本人たちが漠然と持っていた密航者への差別感情とはまた異質の、政治的なイデオロギーとも深く関わるものだと思いますが、そういった、もともと日本に定住していた「朝鮮人」と密航者の緊張関係についても、密航者の「恥」の感覚というところから想起しました。

それから、国外退去命令を受けた朝鮮人に特化された「大村収容所」（もともと針尾収容所という名で設立）というワードが出てきましたが、大村収容所の中には1956年頃に「大村朝鮮文学会」（安榮二代表）という文学サークルがあって、『大村文学』という同人誌も刊行されています。こういった活動や雑誌に関しても個人的に関心があり、また詳細をご教示いただければと存じます。

最後に、先生ご自身もおっしゃっていましたが、一口に「密航」といっても、その内実は一枚岩ではなく、その動機や背景もさまざまだと思います。「そもそも、私は〈密航〉という言葉あまり使いたくない」というおことばも印象的で、今日俎上に載せられた「密航の文学」をいかに称するかという問題も、対象との関わりにおいて重要かと思っています。これは例えば、「亡命文学」と呼ぶと政治的な語感を帯びる一方、「越境文学」、「移民文学」などと呼ぶとまたニュアンスが変容することとも似ているかもしれません。名づけに対するこうした問題意識は、パク・ソルメの「広場」の話や、〈社会の恣意性〉などにも繋がっていきます。それでも、暫定的に「密航の文学」というワーディングで関連作品群を束ねて範疇化し整理していただけたことによって、新たな視界が開けてきたのは著明であり、貴重な時間になりました。ありがとうございました。

時間的な制約のため、簡潔に雑駁な寸感のみを述べさせていただきました。以上です。